
キス

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キス

【Nコード】

N4049S

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

過去や現実に関ある男女6人の一週間の心の揺れを書いた物語。短篇でそれぞれを主体にしながら書いています。今回は現実的な話を書こうと思って挑みました。

一巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

一巡目

7月22日の昼、古武雅治の頭

暑っちい。こんなんどうすりゃいいつつうんだ。

昨日、天気予報士が梅雨明けって言ってた。明けた途端にこのありさまだ。梅雨は梅

雨でさっさと終われよって思うけど、終わったら終わったらで惜しみたくなる。勝手と

いわれようがかまわない。それほど暑い。

暑いといっても今日は真夏日を過ぎる程度らしい。これからもつと暑い日はやってく

る。なのに、もうノックダウン寸前の状態だ。多分、体が暑さにまだ慣れてないからなんだろう。とりあえず、そう思っところ。

汗が滴になっておでこから行きたいところに行ってる。前の方に流れると眉毛でいった

ん止まる。そこからなかなか流れていかねえのがムカついてきて手でいつも拭く。横に

流れるともみあげを通過して顎にたまって垂れていく。そんなんに氣い取られてるうち

に首とか上半身とかからいつのまにか訳分かんねえぐらいの大群が発生しててシャツに

びったりと貼っついてやがる。この様を見て、周りのやつらはきつと「あいつ、暑苦し

そう」とか思ってるんだろうな。俺だって太って汗だくになってるやつ見てたらそう思

うんだから、そう思われてるに違いない。決定。

なんともいえぬ嫌悪感。「どうだ、どうだ」ってほっぺたをペシペシ軽く触れるように叩かれてるみたいにイラついてくる。

でも、これはどうにもならない現実。この暑さを止めることなんて出来やしない。そ

んな力、いっぱいしの地球人になんかあるわきゃない。

ああ、こんなこと考えてる時間がどれほど無駄なことか。でもよお、こんな愚痴でも

こぼしてないとやってらんねえんだよ。ふざんけんじゃねえよ。俺がなんか悪いことしたのかよ。なら、なんでこんな仕打ち受けなきゃなんねえんだよ。

・・・・・・そう思っても何も変わらない。なのにやってる俺。

そう、この暑さを一瞬でも忘れるための逃避行。どこに行くかも分からずに飛んでく

だけ。まあ、忘れられるならどこにでも飛んでくぜ。ブンブンブン飛んでくぜ。

あははっ、頭が変な方に行っちゃってる。たまんねえぜ、この野郎。てめえ、夏。い

きなり挨拶もなしに来やがって。この礼儀知らずがっ。挨拶のお菓子は羊羹だぞ、てやんでえ。

俺、こんなやつじゃないのに。崩壊です。ガチコンくらいしたっ。悪く思わんとい

てよ。

要はこれも俺ってことさ。人間、表と裏があるんだから。ただいま、俺は裏に占拠さ

れております。でもさ、なんか裏って気持ちいいなあ。普段しまいこんでる分、開けて

しまうとなんとも快感。真っ裸で外にいるみたい。いいじゃん、いいじゃん、ノッてる

よ、裏の俺。

太陽なんかくそくらえ。

7月22日の夕、野倉智枝美の頭。

到着、市橋塾。

ったく、なんだよこの暑さは。何がしたいんだよ。消えろ。

あああ、今日からどつと暑くなるっていうからせっかく新しい夏物の服にしたのにも

う汗じっとりじゃん。終わったな。

どうしよう。このままだとオヤジ講師どもに下着のライン見られる。あんなしみった

れたやつらにエロい目で見られるなんて寒気がする。いちおう上に羽織るものも持って

きたけどこんな暑さで着たくないし。

まあいい、このままいこう。見たけりゃ見ろよ。どうせ家ではごぶさたなんだろうか

ら目の保養にでもしな。

「おはようございまあす」

第一声の挨拶は笑顔で元気よく、ちょっとかわいさをプラスして。これが鉄則。ウケ

を良くしておけばマイナスは少ない。

「暑っついですね、今日」

とりあえず、鉄板の話題をふっておく。あとは適当に誰かれノツてくるから相槌だけ
うつとけばいいから。

講師用の控え室には半分ぐらいの講師が来ている。ベテランのオヤジ社員もいるし、

就職にありつけない余り者のアラサー契約社員もいるし、自給の良

さ目当ての大学生バ
イトもいる。私はちなみに契約社員。でも、余り者なんかじゃなく
てよ。他のダメダメ
どもと同じにしてもらっちゃ困るつつうの。就職はしてたけど自主
的に退職しただけ。
ここ重要。

っていうか、パツとしないんだよねえ。仕事場に求めることじゃ
ないかもしれないけ
どさ、前の職場のときはもっと全体的に空気が張ってたって感じだ
ったから。社員たち
は生活的にも年齢的にも落ち着いてて話題も年くさいし、バイトた
ちは逆に地に足が着
かずに社会ナメてやがるし。そこにきて、私たち契約社員は危機感
あるから多少は張り
もある。

未就職者は見下されてる感あるけどふざけんたってのよ。そいつ
らの顔写真、一枚ず
つ切り刻んでってやろうか。人にはそれぞれ事情ってもんがあんの
よ。それも知らずに
ああだこうだ言ってるやつらの気が知れないわ。物事を上辺でしか
見れないなんて可哀
相なこと。皮肉をたっぷり添えてあげる。
低脳ども、くそくらえ。

7月22日の夕、桑畠潤蔵の頭。

「君ねえ、どうかと思うんだよねえ」

言われた瞬間は体に冷えたものが流れた。今日の暑さにはちよう
どいいなんて思える

はずはない。そんな余裕があったら、俺ってずいぶん人間だ。きつとこんなところにはいないだろう。もっと良い会社のもっと良いポジションでもっと良い人間としているに違いない。

上司の迷うような言葉は本当は迷っていない。ストレートな言葉をぶつけて恨みを買うのが嫌なだけだ。結局、自分がかわいいってことか。典型的な現代の人間だな。面倒なことはできるだけ避けて生きたい自分主義。

言葉の意味は要はクビ。もう来なくていい、必要ありません、戦力になりません、迷惑です。そんな棘のある言葉を隠して柔に包んだもの。よっぽど頭の悪いやつだったら裏の意味に気づかずこれからも平然と出社しつづけることだろう。一応、そこまで底辺じゃない。

上司はその後も似たようなニュアンスの言葉を並べていった。確信には触れぬまま、遠めに遠めに分かりずらくクビを宣告していく。このぐらいで気づけよ、そう言いたいんだろう。

「分かりました。ありがとうございました」

こっちも確信に触れぬように返した。あなたの言いたいことは分かりました、今までありがとうございました、そういう意味。明日は退職願を持って出社。退職金がせめてもの罪滅ぼし。それで納得して辞めてくれ、そういう運び。

こっちはそれで納得するしかない。ここで反対したところで本当にクビを言いわたさ

れるだけだ。そうすれば退職金も出るのか危うい。悲しいけど流れに乗っておくのが今はかしい。

話が終わったら平然を保って帰り支度をして仕事場を後にしていく。会社から距離が離れたところまで歩くと線がぷつぷつ切れて全身から脱力していった。前からすれちがってく人も、後ろから追いついていく人も気にかからない。今ここに独りきりの空間が広がっていった。

終わった。最悪だ。

この世に神も仏もありゃしない。あるんなら、ずいぶん弱い者いじめが好きな神と仏だな。何も信じたくなくなるよ、そんな世界。人の人生を面白おかしく操りやがって、ふざけんな。

こんな現実、くそくらえだ。

7月22日の夕、浜森信枝の頭。

流れる波。人の波。来ては去り、来ては去り、その連続。工場のベルトコンベアーに長時間むきあってるみたいな連続的作業。いや、そっちの方がまだマシだ。こっちは規則ただしく動いてくれない。

「あれえ。ないなあ」

来たよ、ストップ。この夕暮れ時の混みあうスーパーのレジ事情を分かってくれない
老人が。こっちは来る波を一つずつ流してくだけで手いっぱいだった

てのにそれをせきとめてくれてよお。あんたが止まると後ろから次々に波が来るんだよ。どうして分かってくれないかねえ。

「おかしいなあ」

多分、老人は会計の値段をぴったりの小銭で出そうとしてそれを見つけれないでいる。ぴったりで出してくれるのはおつりを渡す手間が省けるから助かるけれど、それに時間をちんたら使うのはぜひ止めてもらいたい。

大体、後ろで待ってる人の気持ちになればすぐに分かるんじゃない。混んでて列ができてるときに自分が前の人にそうされたら嫌なはずでしょ。なんでそれが出来ないのかなあ。こういうのって大概はある程度の年齢いった人なんだよね。年とると自己主義になるのが多いんだよな。自分がよけりゃいいっていうわがまま。振り回される側の身になってよ。

「確かにさっきはあったんだよ」

知らねえよ、そんなの。無いもんは無いんだから言い訳すんな。さっきあったんなら、

それから使ったか盗まれたか落としたか単なる目の錯覚だ。

老人は怒りぎみに千円札を出した。はっきりにって怒りたいのはこっちと後ろに並んでる人たちだ。あんた一人のせいだここにいる数人の時間が奪われた事実にあづかずに怒ってるんだから幸せなもんだよ。

「なんだよ」

捨てゼリフの後、舌打ちして老人は去っていった。

正直、噴火寸前。顔は愛想笑いを浮かべながら心で握り拳をつくって我慢する。客商売だし、他の人たちも被害者なわけだから。なんなら、みんな仲良くあの老人に中指を突き立ててやろうぜ。

わがまま老人、くそくらえ。

7月22日の夜、千代原靖司の頭。

高層ビルの上階、窓の外を眺めれば心が洗われる夜景が広がっている。晴れた日には昼も夜も結構ポイントの高い景色が見渡せる。仕事場の環境としては何も言うことはないだろう。

ただ、集中してしまうとそこに気を捉われる隙間はなくなる。目の前のデータや書類に向き合うだけになっていく。たまに同僚に話しかけられたのにも気づかないことさえある。シカトしたただとか機嫌を損ねられることもあってよくないけれど体に沁みついたものは中々変えられない。

「お先です」

今日の仕事を終わるとそそくさと会社を後にしていく。だらだらと同僚と話しこんだりはしないし、仕事帰りの一杯にくりだしたりもしない。仕事場の関係をあまり緩くさせたくはない。気を張りつめるつもりはないけれどそれなりの緊張感も必要な関係だと思っから。

エレベーターに乗ると長めの時間をそこで過ごす。この時間は案外気に入っていたりする。大きく下降していく間に仕事用に張っていた気持ちを落ち着かせるのがなんともいえず心地いい。逆に、朝はここで大きく上昇していく間に仕事用に気持ちを張らせていく。

ビルから外の世界へ出ると涼しい風が吹いてきた。今朝の通勤は暑さに萎えそうになっていったけれどこの時間にもなれば気温も下がっている。とはいえ、夏本番の夜の気温もバカにならないが。

「あっ」

思わず声が出た。忘れ物だ。自らの失敗でどこにも責任を泳がせられず、天を仰いで息をつく。

しかたなく会社へと戻っていく。近くで気づいたのがまだ不幸中の幸い。自分をなぐさめるようにそうする。

会社に着き、デスクのある部屋へ入ろうとする。入らない。入るのを止めた。ピタリと止めていた。理由は部屋の中から聞こえた言葉。最初は直感で感じとったものだったけどだんだんそれが正しかったものと分かっていく。部屋の中では同僚たちが自分に対する嫌味を言っていた。言葉はさまざまだけどどれも胸の内をチクチク刺すものばかりだった。

結局、忘れ物は取らずにその場を後にした。同僚の嫌味も最後まで聞くことはせず。

聞いてても気分は悪くなるだけだし、聞いたからといって何がどうなるわけでもない。
相手への接し方が変わるの嫌だし、自分自身のスタイルを変えることもしたくない。
他人から少し悪い言葉があったぐらいで大きく揺れ動くような柔な軸で立ってたら簡単に吹き飛ばされてしまう。ここは本音は噛み殺して明日からも同じ空間を保つのが大人の行動だ。

陰口ごとき、くそくらえ。

7月22日の夜、柳館修子の頭。

国道を走る中古のスポーツカーの助手席。乗り心地はいい。車自体の質の良さも当然あるし、新車にはない安心感が中古にはある。ただ、運転席にいる男は中古ということ
を一度も口にはしてこない。言っ
てこないからこっ
ちも触れやしない。男のプライド
ってやつか、めんどくさい。

なぜか私が付き合う男には見栄っぱりが多い。自分を高く見せようと
する。まあ、私
がそうさせてしま
ってるのかもしれない。私の外見は
どうやらお嬢
様育ちみたく見え
らしい。全然そんなことないのに。
どこにでもある一般家庭でどこ
にでもある人生を送
ってきただけ。

デートは海岸沿いをドライブ、リッチなレストランで食事、夜景を眺める。今までの

どの男もそのコースを用意してきた。計画してくれるのは嬉しいけど、どれも見せかけの私だけを見られてるようで気が乗らない。本当は家の近くを散歩するデートとか憧れるし、ごはんと味噌汁とおかずっていうザ・和食が好きだし。ちゃんと心の奥まで見てくれる人がいない。

運転席にいる男はさっきから休みなく話しかけてきている。よくそんなに喋ることがあるなっと思う、男のくせに。

本格的な喋り好きか意識的に喋ろうと心がけてるのか。

前者なら今後が辛い。いつもそんなに話されてたらうざくなる。基本的に男の喋り

好きは嫌いだ。女は自分の話したいことをあるだけ話して、それを聞いてくれる男がいもんだから。男側の話したいことなんてどうでもいい。むしろ、喋らない男の方がまだマシ。無駄な言葉を発しない男はカッコいいし、お互い黙っててもそれが一つの空間として成り立つならいい。

後者なら好印象だけど今にかぎっては違う。意識的ならこんなにペラペラ言葉は続かないはず。用意してあった会話なら用意していたと思われないように逆に流暢にならないうように思う。こんだけ流れざまに言葉が出てくるなら前者だ。

だから、きっと私にはこの人は合わない。この関係もそう長くはないだろう。

あああ、結局は人はイメージでしか見ないものなんだな。なんだかんだ言いながら、

綺麗な男は綺麗な女と結ばれていくばかりだし。性格重視ってよく聞くのに。そりゃ性格もいいんだろうけど、だったら綺麗じゃなくて性格のいい女でもいいじゃん。シンデレラストーリーなんてそうそうないのかな。ないからシンデレラスてるんだろうし。要はシンデレラストーリーなんて言葉になってる時点で問題なんだよねえ。

上っ面しか見れない男どもなんてくそくらえ。

一 巡目（後書き）

全六話、本に換算すると85ページになる量です。

二巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

二 巡目

7月22日の夜、古武雅治の頭。

キンコンカンコン。市橋塾の教室にひびく鐘が希望の音に聞こえてきた。ガッツポーズ。

ズしてやりたい気分。木村カエラの曲まで頭に鳴ってきやがった。終わったあつ。そう叫んでやりたい。やらないけど。生徒がやってるけど。

気持ちとは分かるよ、皆の衆。講師だってやりたくて授業をやってるわけじゃないから

ね。やりたくてやってる奴なんてそうとうな熱血モンだよ。スクールウォーズの山下真

司ぐらいだよ。残念ながら現代にあんな教師はまあいない。急にキレだす生徒や過保護

な親の波がいつ来るかとおびえながら日々やりすごしてる。

まあ、塾はそのぶんプレッシャーなくていいけど。ナメられない程度に緩くやればいい

いし、嫌われない程度に堅くやればいい。そこまで深く係わる必要もないからその場をしのいでればいい。

講師用の控え室にはデスクワークをしたり、授業から戻ってくる講師で密度が高くな

る。社員のオヤジどもはメタボ率が高めだし、バイトの大学生どもはペチャクチャうる

せえし、夜になったってのにまだハンパなく暑いし、やってらんねえ。

この状況において害がないのは俺を含めた契約社員たち。若くも

あるし、若いばっか

じゃねえところに足はいつてきてるし、自分への危機感があっていい。こういう真面目

さを取り戻せ、その他の面々。

「古武先生、1年のAクラスの出席簿ありますか」

おっと、野倉先生カットイン。

1年のAクラスはさっきまで授業してたところ。そうか、出席簿はまだここだ。

「ああハイ、どうぞ」

そそくさ探しだして出席簿を手前のデスクの野倉先生に差し出す。その瞬間、今日の

暑さで露出多めの服になっている野倉先生の前かがみになった胸元のシークレットゾー

ンに釘づけ。谷間と呼べるほどか分からないぐらいの空間ではあれど、この俺にとって

たまらない夢の時間がおとずれたのは間違いなしっ。よっしゃあ。

いいところあるじゃね

えか、夏。

「ありがとうございます」

そう言ってデスクワークにもどる野倉先生。

同じくデスクワークにもどるも集中力があきらかに減った俺。そりゃ、あんな素敵な

景色を見せられたらそうなるでしょうに。裸のネエちゃんもいいけど、この微妙なライ

ンのエロチシズムも心くすぐられるなあ。ましてや野倉先生ぐらいのレベルになったら

なおさらだ。

7月22日の夜、野倉智枝美の頭。

よしっ、今日の仕事は終了。

ああっ、やっと帰れる。これで家まで辿りつけば天国だ。クーラーをガンガンかけちやって、ビールをガンガン飲んじゃって、アイスを心ゆくまで食べちゃうぞ。待ってろ、天国。

「お先です」

まだ残ってる講師の人たちに優越のバイバイ。私は先に夢の時間に行かせていただきます。

市橋塾を出ると仕事を離れた開放感につつまれる。この感覚、いつもたまらない。

今の仕事にそこまで苦しみはないけれど、やっぱりお金をもらって働いてるっていう気の背負いはある。っていうより、なきやダメでしょ。契約社員といえど遊びでやってるんじゃないし。

「あっ、お疲れさまです」

「あっ、お疲れです」

エレベーターのところにとちょっと先に帰ってた古武先生がいた。

どこの階も帰宅時間

だからなかなか来ないのか。

「来ない感じですか」

「そうっすね。もうすぐですけど」

待つものには慣れてるけどこの暑さが足されるとイライラが増しになりそう。これから

の季節は鬼門の一つになりそうだな。

「暑いですよええ、今日」

「ホントですよ。これからこんなのが続くと思うともう無理っす

よ」

「ねえ。ウチはまだ冷房きいてるからいいけどないところなんか地獄ですよ」

「俺んところ、中学も高校も冷房なかったっすよ」

「ウチも。高校なかったです」

「アレ、よく耐えてたなあって思いますもん。多分、若かったからどうにかなったんでしょ」

「そうそう。今なら絶対ダメですよ」

「そうそう。窓から風くるの待って、下敷きであおいでなんとかしのいでました」

いつのまにか学生時代のことにまで話がのびて、気づけばエレベーターに乗っていた。古武先生は同じ年だからこういう話が合う。同じ契約社員だし、精神的に近いものは感じている。まあ、学生時代に同じクラスだったとしたら特に印象に残ることもない

タイプだけど。顔も良くはないし、雰囲気もなんとなく陰に映るし。アキバ系って言われたら疑うことなく納得できる。実際どうかは知らないけど。

「じゃあ、また明日」

「はい、また明日」

まっ、どっちだっていいや。今の私に大事なものは天国のみ。

7月22日の夜、桑畠潤蔵の頭。

「ああ。なんなんだよ、くそつたれが」

居酒屋の一席、俺は明らかにつぶれていた。初めからつぶれるつもりで行き、つぶれるつもりで呑み、例のようにつぶれた。普段から酒を呑みながら日

頃のうつぶんを吐きだすのは習慣になっていけるけれど、今日ばかりはそんなところに落ち着いてなんかいない。

「まわりくどいことばっか言いやがって。いつも命令したり注意したりするときみたいにズバツと言えってんだ」

「まあまあまあ」

周りの客にモロに聞こえる大声を發しまくる迷惑な酔っ払いを友がなだめてくれる。

言うまでもなく俺は前者。後者はこんなどうにもならないやつにも付き合ってくれる我が友、古武雅治。

「クビとかマジふざけんなよ。弱いのはどこにも居場所なんてねえのか」

「そういうわけじゃないって。たまたま今の会社が合わなかったんだって」

またそれかい。何度同じ状況になってもその言葉ばっか。じゃあ、俺に合う会社ってどこにあるんだよ。もう探し疲れたつつうの。

「もお……嫌だあ」

今の真たる本音です。もう嫌です。何もかも嫌。就職活動に奮起して、面接で人間

ごと否定されるような扱いすら受けて、やっと働けるとこ見つかって頑張るけどうまく

結果でてくなくて、年下に抜かれて後輩に抜かれて立場もくそもなくなつて、それでもプライド擦り減らして毎日やってたら末にはクビ。

何がいけないっていうんですか。俺はそんなにやっちゃいけないことでもしたって

うんですか。してませんよね。だったら、一体この仕打ちは何なんですか。勘弁してくださいよ。

「まあ、俺が言えるような義理じゃないけどさ、こういうときもあるってことだよ。

でも、いつか絶対に良い日が来るから。間違いない」

確かに塾の契約社員でしかない友の励ましに説得力はなかった。

ただ、こんな一緒に

いてもどうにもならないような俺の傍にいてくれるやつなんてそうそういないんだから

それだけで感謝にいたる。

長渕の曲が頭に響いてる。その歌詞に合うような人間じゃないけどそこに浸りたくてたまらない気分になった。

7月22日の夜中、浜森信枝の頭。

「潤ちゃん、会社クビになったって。さっきまで愚痴きいてて、今かえってきた。例

のように荒れてたよ。明日、退職願を出しに行くって。なんか声かけてあげて。吞んでるからもう寝る」

そろそろ寝ようかと思ってたときに来たメールは雅からだった。

友達のクビをいやにあっさりと伝えている。まあ、数回目にもなるから慣れたもんなんだろう。証拠に、私

もさほど驚きがない。またやったか、っていう程度。

携帯を閉じると自然と深い息をついた。あっさりと受けとめたわりに潤の危機的状况

に重なる部分があった。潤は不器用なやつだけど、そういうやつは本当に捨てられていくんだなっていう容赦ない現実。それについて会社側を非難するつもりはない。会社だって生き残りをかけて必死なんだからしょうがない。きっと潤だってそこは分かっている。心底うらんでなんかいないだろう。私だって就職してたら同じ目にあってるかもしれない。いいし、そこに怯えるような毎日を過ごしてると思う。

社会への適応性が低い潤に対して私はどこか冷めた印象がある。もっとうまくやれよ、だらしないなあ、そう思うことがある。

ただ、それ以上に応援もしている。私はその舞台にも立ったことがないから。

大卒のときに私は一つも内定を取れなかった。一応それなりの数は受けたし、適応性

って面でいえばまあまあぐらいはある。一つぐらいはいけるだろう、そこに入ればいい

だろう、それが油断だったのかもしれない。私には必死さがなかった。正直、周りにい

る人たちからはビシビシそれを感じられた。でも、私にはなかった。それまでをなんと

なく生きてきた私にはスーツできめて社会人として背筋をのばす自分像が浮かんでこな

かった。それが会社側にも伝わったんだろう。こんなやる気のない人間に手を上げてくれる情けのあるところは現代にはない。

だから、潤のことは素直に誇らしい。内定を取って会社員になっただけで私より

上だ。内定を取れなかったショックで今のスーパーのバイトに落ち

着いた私なんかより
全然上だ。

それだけじゃなく、潤はクビになってもまた次に挑戦していく。
そんな気力すら浮か
んでこない私にはうらやましいぐらいだ。向こうは男でこっちは女
っていうのもあるん
だけど。

なんだか空しくなってくるよ。とりあえず、今日のところは寝よ
う。

潤にもなんか言ってやんないとなあ。

7月23日の朝、千代原靖司の頭。

朝の目覚めはいい。全国平均がどのくらいかは知らないし知った
こっちゃないが20
代男性ではいいほうだろう。目覚まし時計に必要以上の仕事はさせ
ていないし。一度目
できちんと起きる。

まあ、今日にかぎっては例外ともいえる。昨日が今年の最高気温
だったのをうけて、
この晩は今年最初の熱帯夜を記録すると気象予報で言っていた。寝
苦しさはこの上なく、
何度か耐えきれずに目を覚ました。他の人もきつとそうだろう。こ
んなのが続くかと思
うとやってみられない。

とりあえずこの気だるさを消したくてシャワーを浴びた。嫌なも
のが洗い落とされて
よかったが、結局は外に出てしまえばまた汗をかくのは分かっている。所詮は気休めで

しかない。

風呂からあがると入る前に電源をいれておいたクーラーがきいていて涼しかった。心も洗われるような爽快感がいい。そこで飲む牛乳もまたいい。所詮はこれも気休めなのは分かっている。

こういうとき、日本の四季をうとましく思う。春と秋は情緒あふれる景色に四季があることに感動するのに、夏と冬はそれを忘れたようになる。人間なんて都合のいいものだ、そう都合よく解釈する。

朝食は前日にコンビニで買っておいたおにぎり2個、インスタントの味噌汁、ヨーグルト。大体これで固定になっている。固定といっても、どれも種類は豊富なものばかりなので味を変えていけば毎日でも飽きはそうこない。

自分で作ればよりいいのは納得してるけどさすがにそこまでの余裕はない。何度か挑戦はしてみたがどれも長くは続かなかった。その時間は睡眠にあてたいのが素直なところだ。

朝食を終えると支度にかかる。毎日やっていることなのでほとんど流れ作業に近い。

思考がどこかに飛んでいてもきっちり終わられる自信はある。今朝の思考は熱帯夜で何度が目が開いたせいで眠りが足りないかもしれないというところに飛んでいた。仕事に差し支えがないかが心配ではあるけれど、まあ満員電車で揺られてるうちに完全に覚めてくれるだろうと安易な結論にいたらせておく。自分で考えておい

てなんだが、こういうのは考えるだけ深くへ行くだけだ。

もう一つ思考が飛んだ先があった。昨日の帰りぎわの同僚の嫌味だ。考えないようにとは思っているがこの類はそうそう離れていつてはくれない。あんなふうに言っておいて、今日会ったら何事もないようにされるんだろうな。ややこしくさせたくないからこっちも同じようにするだけだけど。

7月23日の朝、柳館修子の頭。

朝の目覚めはいい……はず。

だるくて体が起きない。いつもは目覚まし時計と格闘しながらでも起きるのに、今日はそういかない。

昨日の呑みの量が多かったせいだ。デートではワインを軽くいれたぐらいだったけど、家に帰ってからまた呑みなおした。日本酒。なんか呑みたいって気分のときには手を伸ばしたくなる。

特別に何かがあったわけじゃない。これといって何も起こっていない。

要はそれが原因だ。

特別なことがない。何も起こらない。それ。

ありきたりなんだ、私にとって。彼が用意してくれるデートプランやプレゼントはよくあるタイプのものばかり。それが悪いなんて言わない。私のためにやってくれている

ことは嬉しい。でも、心を揺さぶられるようなものがない。

海岸沿いのドライブは良い。風も気持ちいいし、景観も綺麗。

高級レストランの食事の良い。緊張こそするけど気分はいいし、味もおいしい。

夜景を眺めるのも良い。灯りの集いは素敵だし、ムードにもひたれる。

ただ、そこまでにしかない。それ以上の心の高揚がもたらされることはない。誰

かに言ったら生意気な小娘とか思われそうだけど、それが正直な思い。

どこかのドラマで見たような、どこかの雑誌で見たような、今までの彼氏もやっていった典型的な感じにしか思えない。というより、それが歴代の恋が終わっていった理由でもある。

私が冷めてしまう。デートをかさねてくうちにこの思いになり、物足りなさを感じてきて別れをきりだす。それがいつものパターン。

そして、今この思いになっているということは恋の終わりに向かってるっていうこと

になる。私の勝手な思いで別れるのは心苦しいけど、このまま続けたらもおそらく未来は変わらない。

こうなってしまうことには理由がある。忘れられない恋がある。

この心が揺さぶられた夢中になった恋が。それを自分の中で消化できず、それを越えてくような恋をしたくても壁になって出来ない。経験をかさねてくほどだんだん深みにはまってる。どんなに

大人な理想的とされる恋をしても越えられない昔のなんてことない

恋が私をいつまでも
苦しめてる。

二 巡目（後書き）

全六話、本に換算すると85ページになる量です。

三巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

三巡目

7月23日の昼、古武雅治の頭。

あぁっ。燦々と光りかがやく太陽と無気力な俺。自然の猛りに対してあまりにも無抵抗な人間たち。乱れる大波を止めることもできず、迫る台風の進路を曲げることもできず、季節を変えることなどもつてのほか。せいぜい文句をたれるか頭の中でぐるしかない。

夏本番というやつは明らかな本気だった。夏とのたたかいは即効ノックダウン負け。あっさりと白旗をあげた。勝てやしない。勝つ方法が見えないし、おそろく探してもないだろう。

昨夜のニュースでは突然やってきた猛暑に熱中症で倒れる人が続出したつてのを大々的にやっていた。1500人以上が搬送されて死んでる人までいたらしい。画面にはいかにも暑そうな様子が映され、健康の注意をうながすナレーションがはいってた。街角インタビューで「なんとかかないんですかねえ」みたいに言うてるサラリーマンが多くいたけど、なんとかしたいんだったらそんな直射日光あたるところで喋ってないで近くの日陰にでも行ったらどうだと言ってやりたくなったのは俺だけじゃないはず。

ってか、ここまできたらシャレになんねえ。だって、室内でも倒れてる人いるんですよ。どうしろっていうの。台風でも来てもらうしかないでしょ。ただ、それはそれで厄介なことになりそうだから直撃はさけるぐらいで。

自宅から仕事場の市橋塾までにかかる時間はおよそ40分。こいつをいかにしてやりすごすかが大きなキーになってくるだろう。

徒歩のときはなるべく日陰を選んで歩く。やむなく日向を歩かざるをえない場合は気持ち速めに歩く。上は向かず、ひたすら下を見て進む。

途中にあるスーパーやショッピングセンターには立ち寄る。ああいうところは冷房がよくきいてるから有効に涼ませてもらう。

信号待ちのときは絶対に日陰。信号のそばに日陰がなければ多少不自然な立ち位置だ

としても日陰のあるところまで離れて待機。背に腹はかえられない。信号が青になった

と同時にスタートダッシュするやつなんて笑ってやればいい。日向か日陰か、重点はそこだから。

最寄り駅のホームは何気に苦戦する場所。ホームは日陰なんだけどそれまでに感じてきた暑さの貯金がここでドバツとやってきやがる。マラソンを走り終えた後は歩いてても呼吸は乱れてるように、バイキングで食べ終えた後はジツとしててもお腹がきついよ
うに、日陰で立ち止まってもそれまでの暑さのせいで体が休まらずに汗もダラダラと流れてくる。

電車に乗るとそこは束の間の天国。冷気に体は一気に回復していく。2 駅だから席には座らない。座っても背中に汗がべったり服に着くのが嫌で寄りつかれないし、扉付近の方が冷気が強く当たってくれる。

電車を降りれば、あとは塾までを歩くだけ。駅からは7分ぐらいだけどそれまでの道に日陰があまりなく、涼めるスーパードライなものもないからここが一番の難所かもしれない。まあ、塾にさえ着けば冷房にありつけるからラストスパートだと自分に言い聞かせて邪心をはらって歩ききればいい。あと少しで塾、あと少しで冷房、あと少しで救われる、それだけ。

大事なのは余計なプライドを持たないこと。男らしさだとか格好よさだとか気にしてられるか。そんなものために倒れたら意味がない。死んだらどうする。あの世で絶対に後悔することになるぞ。プライドなんて都合よく捨ててしまえばいいのさ。逃げるが勝ち。

7月23日の夕、野倉智枝美の頭。

クーラーっていいなあ。冬に見ると邪魔だなんて思うけど、夏に使うとこの体を天国まで連れてってくれる。最高。マジ最高。誰がいつどこで作ったとか知らないけれど、その人大好き。

家から市橋塾までの道のりは最悪だけど来てしまえばなんとかある。塾はクーラーあるし、帰り道はある程度は温度さがってるし、家に着けばだらけるだけだし。ああ、さっさと終わればいいのに。ってか、うつせえなあ。授業中なんですけど。ガヤガヤ喋んな、人がせっかく教えてんのに。

1年のCクラス。正直、最もタチの悪いクラス。ウチの市橋塾は中学生と高校生を担当していて、それぞれの3学年を成績順にAからCクラスに分けている。Aが上、Bが中、Cが下。3年はCクラスでも受験に向けて真剣さがあるけど、1年のCクラスには全く覇気がない。頭が悪い、勉強が嫌い、勉強をしない。そんなふうにもならないやつらの集団。

多分、親の意向で塾に入れられてるんだろう。本人たちにはやる気がないのに。親も塾に行かしておけばとりあえず大丈夫だろうって予防線にしてるだけに違いない。塾に入ってくれるのは塾側にはありがたいことなんだけど、なんとも効率の悪い金の使い方だ。諭吉が泣いてるよ。私ならその金でジュースとアイスを買いまくって、クーラーを使いまくりたい。

このクラスの特徴としては基本的にまじめに授業を受けることはないし、講師の言うこともほとんど聞き流してる。周りの人間とこそこそせず喋ってる。こっちが注意し

たって喋ってる。「早く終わんねえかなあ」ってよくぼざいてっけど終わったところでどうせやること一緒だろ。今喋ってるやつらと場所を変えて喋るんだろ。その喋ってる内容、数日後には忘れてるだろ。

ただ、なぜか黒板に書いてることだけはきちんとノートに写している。これはおそろく学校の授業でもそうしてるから自然とそうしてるって習慣だろう。授業を聞いてなくてもノートさえとっておけばと思ってるパターン。黒板に書かれてるのは授業の要点なわけだから、それを写しておけばテスト前に見返せばいいって安易な発想。学校の勉強を学力向上じゃなく、テストをしのいでくことと誤ってとらえてる残念な認識。まあ、「そんなん社会に出てから使わないっしょ」ってのは社会に出た者としてあながち否定できないけど。

結果、そういう冷めた都合のいい割り切り方をしてるのがCクラスに来るってことだろう。嫌なことでもやっていくことは社会に出れば普通にあること。一つ一つの努力の積み重ね、それを身をもって憶えていくのが勉強。逆境で折れずにいく我慢や忍耐も学べるし。悪いことばっかじゃない。悪いことだけしかないなら他の人たちだってやっちゃいない。

って、そんなこと言おうと伝わりはしないんだろうけど。それを説きふせるほど私は熱くはない。こうやって心の中で全てをぶちまけるのが関の山。我

慢や忍耐は勉強から
学びましたから。

7月23日の夕、桑畠潤蔵の頭。

会社を出て、外の空気にふれると何かが無くなった。肩にずっとあつた重圧がふっと消えて、心の中にぽっかりと穴が開いたようになった。今ここにいるはずの自分なのに、体の中は空っぽの置き物みたいだった。風に吹かれてどこまででも行ってしまう、そんな感覚。

さつき退職願を提出し、会社を辞めてきた。「辞めてきた」なんて上からもんじゃない。単なるクビだ。気持ちばかりの有給を消化し、気持ちばかりの退職金をもらう。要は金で解決。向こうがそれを提示して、こっちがそれを呑んだ。向こうは円満的な退社になるように変に逆らわれたくないし、こっちも嫌な思いで終わりたいくはない。その相互関係を突いた策だ。こっちも何回目かだから逆らったりあがいたりする無意味さは分かってるし、今後を考えると金は必要だから呑むしかない。向こうの望む解決策と知りながら受けるのは悔しさもあるけどしかたない。

そこまでは覚悟をつけていたし、上司と一対一だったからよしとしても、その後の挨拶は緊張した。今まで迷惑をかけた同僚たちの視線を直視するのがきつかった。勝手に

その視線を鋭利なものとしてしまってるのかもしれないけど、クビになるくらい仕事のできないやつなんだからそうも思いたくもなる。挨拶自体は無難にこなせたのがせめてもの救いだ。

「お疲れさん。次んどこでも頑張れよ」

「お疲れさまです。今までありがとうございました」

挨拶の後、同僚から言葉をかけてもらった。ありがとうと返しておいたけど素直にそうは思えやしない。クビになっていない、単純に俺より仕事のできるやつらからの言葉はどこか上から来るものを感じずにはいられない。やっと辞めるのか、これで仕事やりやすくなる、どうせクビでしょ、そんな言葉が裏に隠れてるようで。卑屈もここまでくれば特技だな。

深いため息をつく。手にさげている大量の荷物がより重くなった気がした。

沈んでく夕日や暗くなってく景色に自分をかさねる。明日になれば陽はのぼるし、景色は明るくなるけど、俺はきっと変わってない。何も変わってない。後退してるかもしれない。

頑張ってたんだよ。俺だってみんなと同じようにやってんだよ。なのに、どうして俺にだけ結果が出てくんないだよ。不公平にもほどがあるだろ。もう、自分に悲しくて泣けてくるよ。

7月23日の夜、浜森信枝の頭。

「もしもおし」

お風呂上がり、冷房で一通り涼んでから携帯を手にとった。

第一声はいつもと変わらない感じでゆるく発した。潤も同じように「うん」って小さなめの返信をしてきた。

どういうテンションでいこうかは考えたけど結局は変わらないことを選んだ。毎回そうしてるし、改まって話すのもおかしいし、そんなピンと張った関係じゃない。昔から続いてるだらだらした腐れ縁。

「どう。元気にしてる？」

ワンテンポ。いきなりはなんだなと思って間をうめた。腐れ縁といえど心に土足で入ったりはしない。

潤は「うん。まあ」と小さなめの返信をしてくる。

「ふうん」

さあ、どうする。切りだすか、切りだすまいか。あんまり長引かせるのもなんだし、もういこうか。だらだら喋って、逆にタイミング失っちゃうのは困るし。

ええい、行っちゃえ。

「雅に聞いた。会社やめるって」

潤は「ああ……」って言葉に迷った。

「もう辞めたの？」

「うん。今日、退職願だしてきた」

潤の言葉はもっと小さくなっていった。そりゃ、傷は生半可じゃないと思う。味わっ

たことのない私にはきつと分からない痛みがあるはず。

「クビ・・・・・・・・ですか」

「・・・・・・・・まあ、そうなるね」

突っこんでいくのは心苦しくもあるけどやらないといけない。潤の傷の深さを知って

あげないと本気の言葉なんてかけられない。よく知りもしないでかける慰めなんて薄く

しか伝わらない。

「まっ、いいじゃない。合わなかったってことだよ」

「・・・・・・・・そうですかねえ」

「潤をクビにするような会社なんだから。かえって長くいなくてよかったじゃん。潤

の良さを分かかってないってことでしょ。そんなどこにいないてすんだんだからせえせえ

じゃん」

「・・・・・・・・そうなんですかねえ」

「そうだよ。未練たらたらなんてアホらしくない？」

「まあ・・・・・・・・そうですねえ」

「ほらっ、元気だして。次だよ、次。絶対、潤に合ってる会社あるはずだから」

そう私なりの言葉をかけていく。重みを分らないこそ言えるのかもしれない励まし。

そして、私と潤の関係だから成り立つ励まし。といっても、探し探りでなんとかやってくるけど。

何分か言葉をかけていくうちに潤は次第に回復していった。痛みの中にはいるのに変わりはないけれど。でも、変化はあった。

「ありがとうね、なんか」

「ううん。まあさ、ちょっと休んでゆっくりしなよ」

「うん。そうだね」

少しでも回復してくれてよかった。同時に、ため息も一つもれた。

7月23日の夜、千代原靖司の頭。

なんてことのない居酒屋のチェーン店。店員の威勢のいい声や酔っ払いの音量調整のきかない声が届いてくる。それなのに一切そんなことは気にならない、あらためて考えるところおかしな空間だ。値段があがっても呪縛から抜けられないのか意地になってるのか分からない喫煙者のふかすタバコの煙もあり、いかにも不健康そうな場所なのは誰にも明らかだ。

普段はあまりこういう店には来ない。一人で吞むときは家が多いし、女性と吞むときはもっと雰囲気の良い店に行く。男友達と吞むときか職場の忘年会くらいだろう。今は前者になる。

今日の仕事はどこか力を出しきれなかった。昨日の同僚の陰の嫌味が頭から消えてくれず、集中できないままになってしまった。隠れたところではああ言い、本人の前ではそんなこと何もなかったようにしている同僚たちの姿にどうにも消化しきれない思いがあつて。

言いたいことがあるなら本人に直接言え。それをしないんなら心の中にだけしまっておけ。

俺だって言いたいことはある。仕事について、待遇について、上

司について、後輩について。ただ、そんなのは誰も同じだ。誰しも胸に不満をかかえながら踏ん張ってやっ
てるんだ。

そう思いをめぐらせてると仕事がうまく手につかなかった。といっても、同僚に昨日のことを聞いていたと告げる気はない。職場の空気を悪くしたくはない。こっちが耐えればいいだけのこと。

でも、ただ耐えるのは苦痛でしかない。自分だけが被害をこうむるのを受けとめれるほど出来た人間じゃない。どこかにこのやり場のない思いを吐きださないととしてここに来た。

誘ったのは雅さん。大学の先輩でこういう類の状況のときには必ず来てもらってる。わりとプライドは高い方だから年上にしか愚痴は言わない。同い年や年下には自慢話を中心に熱く語ることが多いから弱味は見せたくない。

雅さんを選ぶのは付き合いのある先輩の中で一番ダメな人だから。自分を高めておきたいので基本的に上昇志向のあるポジティブな人と付き合うことが多い分、この人は異色といえる。自分を高みに置こうとする意識は少なく、ネガティブな発言や行動がとにかく多い。就活戦争にも見事に負け、30歳手前にしてまだ職についたことがない。まあ、俺が面接をする側だとしてもこの人を会社にはいれない。まっさきに落とすに違いない。

だが、不思議とこの人とは離れない。多分、俺の中にあるネガティブな部分がそうさ
せてるんだろう。普段はポジティブな人間とばかりいるからネガティブを出しにくくある。出したとしてもおそらく彼らはそれを受けとめずに流す作業をするだろう。彼らは
ネガティブな発言や行動を必要としないから「大丈夫」とか「頑張れ」という言葉
を使っていけないものとして流す。俺もそうするだろう。

ただ、勝手だけど自分が落ちこんでるときには受けとめてほしい。俺のネガティブを受けとめてほしい。単純な言葉で流してもらいたくはない。だから、この人を選ぶ。雅
さんは他のやつらよりも数倍はネガティブを知っている。痛いほど体感してきている。

この人は分かってくれる、そう思って。

雅さんを誘うのはほぼこういうときだけ。普段はメールでのやりとりぐらい。悪いと

は思うけど、この良くない空気をあまり取りこみたくはない。ポジティブの周りには同

じ者が集まり、ネガティブの周りにも同じ者が集まると思うから。

実際、雅さんの周り

にいる人たちも似たようなタイプが多いらしい。

俺は昨日の出来事を含めた今の不満を雅さんへぶつけた。それに対する明確な助言は

必要としていない。この境遇を味わったことのない人に的確な言葉は思いつかないし、

聞いてもらうことを第一にしてるからいらないし、何か言われたとしてもそのまま流すだけだし。

結局、雅さんから返ってきた言葉はやんわりとしたものばかりだった。誰でも言えるような無難なもの。まあ、それでいい。分かったようなことを言われたら逆にイラつくだけだ。

話が一段落すると話題は女性のことになった。近めのテーブルにいた女が中々かわいかったのがきっかけになって、「彼女でもいれば心持ちも違ってくるんじゃない？」ってことになった。プライベートで気持ちの切り替えができる時間があれば確かにそうかもしれない。年齢イコール彼女いない歴の人に言われるのもどうかと思うけど納得はいった。

仕事に集中してるから彼女をつくることには積極的ではない。うまくいきそうな関係があるなら、という程度。学生の頃のように恋愛に執着したり、グツとのめりこむ余裕が正直ない。

「あの子はどうなの」
不意にきた抽象的な言葉だったけどそれが誰を指してるのかを悟るのに時間はかからなかった。

どうしても忘れられない過去がある。心の中から振りきろうと何度こころみても離れない。

分かってる。きっと本気で失くそうと思ってないからだ。まだここにいてほしいと男の情けない未練を残した跡。

7月23日の夜、柳館修子の頭。

もやもや。もやもや。もやもや。

我に返る。家のリビング。フローリングの床に直に座ってる。気休めの冷たさ。

テレビ画面に映ってるのはべつに見ようと思ってるわけじゃないドラマ。なんとなく

チャンネルをここで止めていた。

見たくもないドラマを選ぶときは考え事に入りこみたいとき。バラエティは派手だし、クイズや情報番組は集中しちゃうし、ニュースは現実的で目がうつっちゃうから適してない。

目の前のローテーブルには缶ビール。ここに持ってきた記憶はある。呑んでいる記憶

もある。味わいもおぼえてる。なのに、どこかそうじゃないような感覚。慣れと集中のたまもの。

もやもや。もやもや。もやもや。

我に返る。家のリビング。ソファに移って寝転んでる。ため息ひとつ。

テレビ画面には何も映ってない。ドラマが終わって、チャンネルのゆくえに困って消した。

一人暮らしのマンションの一室には扇風機の静かな音が流れている。エアコンで満足

するだけ涼んだら扇風機に変えるタイプ。考え事をしながらでもこういうことは自然と

やっている。自分の中に組みこまれてる生活感なんだろう。

外からは車の走る音が聞こえてくる。バイク、軽自動車、トラック、まれにサイレンもあり。単調な流れは集中するのにはいいけど、たまに大音量の音楽や酔った歩行者の

大声が空気を読んでくれない。

缶ビールは空。もうちょつとぐらい呑んでもいい感じだけど、もう一本まではいらな

いから手はのばさない。それに、わざわざ取りに行くのも面倒くさい。夏場の疲れもあるし、考えてる最中に必要以上に動きたくない。

もやもや。もやもや。もやもや。

我に返る。寝室のベッド。横にはならずに座りこむ。電気は豆電球。

視界の中に移ろうものはない。いつも目にしている部屋が薄くなっているだけ。

外からは変わらず車の流れが聞こえてくる。こんな夜中にでもずいぶん多くの人たちが車を走らせてるもんだ。

考え事は続いている。過去の思い出と未来の妄想。過去の後悔と未来の期待。期待のとおりになんかなってくれない。だから、過去が後悔になってるんだ。

だけど、未来が希望になる可能性はある。過去は変えられないけど、未来はどうになるかもしれない。

でも、そうするための努力への勇気がない。未来を希望にしたいけど、また後悔にはしたくない。後悔になるぐらいなら何もしないほうがいい。その葛藤の連続。

結局、答えは出なかった。深いため息ひとつ。もう考えたくない

と思ってベッドに横
になったけど、余韻なのか頭からしばらく離れてくれなかった。

三巡目（後書き）

全六話、本に換算すると85ページになる量です。

四巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

四巡目

7月24日の夕、古武雅治の頭。

天国なう。

ツイッターとか興味本位で一回やってみただけだけど今はこの言葉にかぎる。たまんねえぜ、このやろう。

今日も家から市橋塾までの死のロードをなんとかクリアした。着いてしまえばあとは冷房があたたかく迎えてくれる。んっ、変な表現。まっ、いいか。

今日の授業は2年のBクラス。学力は名のとおりにまあまあ。Aクラスほど勤勉じゃないし、Cクラスよりは集中力はある。一応やつとくってぐらいのかげん。

今日は事前に予告しておいたように小テスト。授業をしなくていいんで講師には楽っちゃあ楽。問題を作るのとか含めるときほど変わりはないんだけど。しかし、教室も冷房がきいててくれてなんとも気持ちいい。仕事場が気持ちいいってのもおかしなもんだけど。外での暑さを頑張ればむくわれる感覚、学生のころのテストや文化祭のときの感じ。他の人なら恋愛もくわえるところなんだろうけど俺には該当しない。年齢イコール彼女いない歴の俺に青春の素敵な恋愛エピソードなんかありやしない。

学生のとときの俺といったらみじめなもんだった。有名学校の進路

のように人生なんて
エスカレーター式に進んでいくもんだろうと漠然とした考えでいて、
恋愛もその中の一
つだと思っていた。青春にさしかかれば彼女ができて、3度目のデ
イトでキスをして、
よきタイミングでエッチをして、20代で結婚して、息子と娘が生
まれて幸せな家庭を
築いてくんだろう。そんなあまりにもぼんやりとした未来を描いて
いた。今、あのころ
の俺に「人生、そんな甘くない」と言ってやりたくてたまらない。
中学に入ると少しずつ周りに彼女ができればじめていく。そのとき
はまだからかいなが
らうらやむ余裕があった。自分にもそのうち、そんな確信もない期
待が。

高校に入るとだいたいのやつに彼女ができていく。中学のころは
イケメンと美人だけ
が付き合えるとされていたものがさほど格好よくない男子にもさほ
どかわいくない女子
が横についていく。多分、恋愛というものへの憧れが強くなって理
想より現実を見るん
だろう。付き合ってみたい、一緒に登下校してみたい、デートして
みたい、手をつない
でみたい、キスしてみたい、エッチしてみたい。そんな欲望が爆発
して。

高校も終盤になってくると付き合ったことのないやつの方が珍し
くなる。中学のとき
は付き合ってるやつがからかわれてたのが、逆に付き合ったことの
ないやつがからかわ
れてくる。周りから自らの武勇伝とともになぐさめられるのは見下
されてるようで実に

悔しいものだった。

こうなると確信もない期待なんて打ちひしがれている。俺ってま
ずいんじゃないか、

その不安で苦しめられていく。だって、周りで誰とも付き合ったこ
とのないやつなんて

ブサイクかデブか陰気な男子ぐらいだし。もはや、欲望を満たした
いというよりもこの

不安を消したいって思いの方が強くなっていく。でも、周りの目や
自分のプライドもあるから誰でもいいなんてブサイクかデブか陰気な女子に妥協するこ
とはできない。イケ

メンと美人が結ばれ、さほど格好よくない男子とさほどかわいくな
い女子が結ばれてる

んだからイケてない俺はイケてない女子にいくべきだと悟ればよか
ったのにこのときは

それをできなかった。今になれば後悔でしかない。

大学に入ると軽い奇人扱いになる。珍種を見るような目をされ、
逆に丁重にもてはや

されてしまう。実に低調な丁重だけど。「そこまでいったんだから
簡単にそこらの女に

くれてやるなよ」とあがめられたけど、こっちとしてはそこらの女
でもないからという

気持ちにすでになっている。

ここまでするとさすがにそこらの女でも難しい。もうブサイク
やデブや陰気な男子

でも彼女がいるやつはいくらでもいるから何か欠陥があるんじゃない
いかとまず思われて

しまう。知り合った女子にも相手にされることはない。どんなに頑
張ろうと最高で友達

までだ。

顔はよくないし、性格はネガティブ、放っているオーラも陰なものだろう。それによって人生うまくいってないことでそれらは年々強調されている。女性を惹きつけるものなんて何もない。自分でもよく分かってる。

それどころか就活もうまくいかず、全てに敗れた。これという手ごたえも全くなかったし、面接官には滅多打ちにされた。社会ってものが怖くてたまらなくなった。こんな男がいいというやつがいるならぜひ教えてほしい。

もはや、三十路前になると諦めもついてくる。この年にもなればたいがい人間には一連の経験はある。年をかさねるごとに社会で経験を積み、外見よりも性格が大事だと悟ったイケてない男女が自己改革に成功して努力の末に相手を見つける。こうなると、社会にも出ていない俺は完全に波に乗りおくれる。自己改革なんて先の先、ネガティブまっしぐらだ。

俺はこのまま何も知らずに死んでいくんだろうか。女性の手の安心感、唇の味、胸の柔らかさ、絶頂の快感。周りのやつらの話している気持ちいいことの何も。嫌だあ、そんなの生きてる意味あんのかよ。俺だって、あんなこともそんなこともやってみたいんだよ。

そのとき、逃避行していた思考が現実リンクする。目の前ではBクラスの小テストがまだ続いている。じゃあ、この気にさわってくる声は何だ。隣の隣のCクラスから

の男女の声だ。あそこのクラスには周りのことはおかまいなしに授業中でもイチャつくカップルがいる。勉強もせず、講師の言うことも聞かないその姿にはいつもムカついている。

ただ、今にかぎっては自分の思いにかさなって大きな嫉妬へと結びついた。怒りに火がつき、自分自身の許容範囲をこえてしまった。隣の教室へ直結している扉へ一直線し、勢いよく開けると憤りをぶちまけた。

「お前ら、ごたごた喋ってんじゃねえぞ」

7月24日の夕から夜、野倉智枝美の頭。

「お前ら、ごたごた喋ってんじゃねえぞ」
ビビった。マジでビビった。

一体、誰が怒鳴りこんできたんだと思ったら古武先生だった。意外だった。古武先生がこんなふうにするのは初めてだったから。怒鳴られた生徒だけじゃなく、教室全体が沈んだように静まりかえっている。

古武先生はその言葉だけで隣の教室へ直結している扉を強く閉めていった。教室には変な余韻がただよっている。シーンとお通夜みたいに静まったまま、授業ごと止まってしまっている。

「ハイっ、みんな集中してね」

講師らしく張った声で気をまとまらせる。私だって何がどうなっ
てこうなったのかは

よく分かんないけど、この状態をなんとかしなきゃいけないのはまちがいに私なわけだから。

授業を再開させるとリズムが戻ったのか生徒たちも話しはじめていく。また怒られないうちに小声になっている。話してる内容は耳に入るかぎりでは古武先生がなんでいきなり怒ったのか、ムカつくとか。自分たちが悪いのに完全に古武先生を悪者扱いにしてる。まっ、生徒なんてそんなもんだけど。その無理やりな矢の的に感情を出しすぎないのが講師の心得の一つでもあるわけだから。だからこそ、なんでそれを知ってるはずの古武先生があんなふうにしたのかが気にかかった。

「すいませんでした。私が注意してないせいで」

授業終わり、講師用の控え室にもどるとすぐに古武先生に謝った。私がやる気のないCクラスだからと私語を容認するように野放しにしていたのが原因であって責任なのは確かだろう。

古武先生は許してくれたというか、逆に怒鳴ったことを申し訳なさそうに恐縮していた。よかった。あのまんまの怒りで説教されたらどうしようと思ってたから。失敗して人は成長するとかいうけれど、出来ることならいい大人になって怒られたくはない。しかも、こんな講師や生徒にも見えるところで。

一安心してデスクワークをこなし、市橋塾を後にしていく。仕事からの解放感を味わ

いながら近場のスーパーに寄る。ここは値段が良心的だからよく帰りぎわに利用させてもらってる。

冷房に涼みながら歩いていくと違和感をすぐに瞳にキャッチした。一足先に帰っていた古武先生がアルコール飲料の売り場の前にいた。私も目的の場所だったけど、さっきのことがあったから若干の気まずさがあったって距離を置いて様子見をする。

周りの人に不信感をもたれないぐらいにさりげなく視線を向けていると古武先生は私が愛飲してるのと同じ缶ビールを数本カゴに入れていった。おお、一緒じゃん。なんとなしの親近感がわいてきて、そのまま後をバレないようにつけていく。すると、古武先生は魚のコーナーでほたてのお刺身、おつまみのコーナーでビールジャーキーを選んでいった。何、それ。本気で私と一緒にじゃん。

「家呑みですか」
趣味の一致を眼前で見たことが気まずさを取りはらっていた。この一方通行の嬉しさを伝えたくてたまらなくて後ろから声をかけていた。

「つていうか、私と同じなんですけど」
顔をほころばせながら伝えても古武先生は意味が分からない様子だった。急に私に声をかけられたことの驚きの方が大きいみたい。確かに仕事仲間に仕事場以外で会うのは変な感じになる。

「私もいっつもこれと同じビールとおつまみなんですよ」
「はあ」

古武先生は明らかに私のはるか下のテンションにいた。それがいいらしい。せっかくの喜びを共有したいのに私だけ勝手に盛りあがっちゃってんじゃない。そんなのズルい。よしっ、引きずりこんでやる。

「よかったら一緒に呑みに行きませんか」

7月24日の夜、桑畠潤蔵の頭。

これまでなら夜になりかけの良い時間だけどやたら暑い。梅雨が終わってからこんな状態がずっと続いている。朝から暑いし、昼はもう日向になんかいらないし、夜でも寝つけないほどの辛さ。2日や3日できついのに、これが夏のあいだ続いてくなんてありえない。傷口に塩ぬられてる感じ。

退職から一夜明けた今朝は変な感覚だった。決まった時間に起きなくていいわけだからとアラームも設定せずに寝てやろうと思ったけど、いつもの起床時間とそう変わらずに目は覚めてしまった。まあ、半分はこの暑さで寝てらんないってのがあるんだけど。それでも、昨日までの生活感を頭でこばんでも体がおぼえてる現実はどうにも嫌なものだった。

起きたところで何をすることもない。探せばいくらでもやることはあるけれど、仕事のように絶対にやらないといけないってことではない。何も拘束のない静けさ、自由っ

て案外さびしいもんだ。

結局、まずは朝食を食べた。残り物のコンビニのサンドイッチとヨーグルトをのんびり食べながらだらだらテレビを見る。祝日ぐらいしか目にしない久しぶりの朝の番組は惹かれるものは特になかった。情報番組が多くならるけど、主婦目線のものばかりで個人的にはいらぬ情報ばかりだった。文句はうかんでこない。きつと俺のようなやつがこれを見ていることが珍しく、番組の方は俺に見てもらおうだなんて思っちゃいなはずだから。

テレビに飽きると掃除をはじめた。あんまりだらけてると精神が萎えてきそうだったから何かやろうと思って。この機会に本格的な掃除でもやろうかと考えたけど、そこまですきつめるほどの根気は今のこの体にはないから却下する。

普通に掃除と洗濯をすると、もうやるのがなくなって外に出た。暑いからやめよう

と思ってたけど、このまま家にいてもやることがない。ずっと家にいたら腐ってしまい
そんな危機感におそわれるから腰が重くなる前に外出を決めた。

といったものの、外は半端ない暑さだった。今まで日中は冷房のきいた社内にいたせ

いで昼間の凄まじさを体感するのは初めてだった。容赦のないとてもなさ。外で仕事

をしている人たち全員に敬意を表したくてたまらない。

逃げこむようにパチンコ店へと入ると幸せな冷氣につつまれた。別にどこに行こうと

いうこともなかったのでなりゆきでパチンコをうつことにした。パ

チンコはまあ好きっ

ていうぐらい。やってみれば面白いけど、これといってやろうと思うこともない。休日

の朝に列に並んでまでなんて情熱はなおさら。

実際やってみると結構いいものだった。目の前の台の流れに集中できて、嫌なことも

その時間は忘れられた。気づけば数時間をあっというまに過ごしてしまっていた。前半

は勝ちぎみだったものの後半にダメになり、結果もともなわず。

店の外に出ると違う空間に來たような熱気につつまれた。今からどこかに行くという

ような時間でもないから夕食と明日の朝食だけ買って帰ることにする。まったくもって

墮落した平日の使い方だ。

歩いているとスーツを着た会社帰りのサラリーマンが多く見える。自分も昨日までは

あの中にいたんだと思うと心がきゅっとすぼんだ。やりきれない思いが波のように押し

しよせてくる。

悔しい。たまんねえ、この気持ち。

敗北感にやられてると携帯の着信で我にかえる。送信者は信枝で、

電話にでると帰宅

を命じられた。

7月24日の夜、浜森信枝の頭。

「うっす」

「うっす」

帰宅するように言うと、潤は8分ぐらいで帰って來た。あいかわ

らず忠実なやつだ。

私の要望には他人のかかわった用事でもないかぎり従ってくれる。

優しいというか気が

弱い。

潤の一人暮らし部屋は年季のはいったアパートのワンルーム。大
学を卒業するときに

実家を出てから一度も引っ越しはしていない。初めはしばらく働け
ばもっといいところ

へ移るつもりだったらしいけど、職を転々としている現状ではそん
な余裕はない。ここ

にもいつまでいられるかっていう暗心さえある。

家に入るとだいぶキレイに片づいていた。自暴自棄になって何も
かもが嫌になるタイ

プもいるだろうけど、潤は良いのか悪いのか真面目なせいでそれは
出来ない。しないん

じゃなく出来ない。物を壊したり、人を傷つけたりするのが苦手で、
もししようもんな

ら後で後悔にかられるだけだ。

近くのスーパーで買ってきた食材で夕食を作りはじめる。潤は手
伝うと言ってきたけ

ど「大丈夫だから」と任せてもらう。

料理をしてる間は何ということもない話を淡々とした。潤は今日
は掃除したり、洗濯

したり、パチンコに行ったり、ゆっくりと過ごしていたらしい。そ
れでいい。息抜きは

こういうときに大事だ。

そう話しながら不思議な感覚にもおちいる。こうして、大人の私
と潤がここにいろ
とが。

潤と雅とは実家が近所で同年だったから昔は常に一緒にいた。

母親同士も仲良かつ

たから私の記憶がないような赤ちゃんの頃から遊んでたらしく、物心ついたときには2

人は当たり前にそこにいた。私は結構おてんばでとにかくやりたいようにやって言いた

いように言ってたから、潤も雅も私には頭が上がりないっていう関係に気づけばなっていた。

雅は強気な私にもちゃんと言いかえしてくるタイプ。よくケンカになってたけど私が力ずくで泣かせていた。今思えば、女の子だってことで遠慮もしてくれてたからなんだろう。

それに対して、潤は私の言うことはいつも聞くタイプ。不満そうな顔はたまにするけど言いかえしてはこない。口でも力ずくでも私にはかなわないんだから賢明な考えだと思ふ。

雅と潤はたまにケンカになっていた。弱い者同士のケンカだから適当にやりたいようにやって、私が間にはいつて終わってた感じ。勝敗をつけるようなものでもない。私のもそうだけど子供のケンカなんて実に単純なものだ。

そんなふうにしてた3人が今は大人になってるのがどうにも変な感覚に思うときがある。昔はあのときのままがずっと続くような気がしていたから。自分が大人になることなんて考えられなかったし、潤と雅が大人になることはもっと考えられなかった。そこに永遠はなかった。

今では3人の関係図は大きく変わってしまったている。私は今でも実家住まいで、就職

をあきらめて学生時代から続けてるスーパーのバイトに落ちついてる。雅は一人暮らし

しをしてるけど、私と同じく就活で内定をとれずに今は塾の契約社員をしている。ゆく

ゆくは正社員になればっていうところ。潤は就活で内定をとったけどクビになり、そ

の後も入っては辞めての繰り返し。ダメダメな3人だけど、この中で一番上にいるの

は明らかに潤。その次が雅、一番下が私。昔の関係は今ではすっかり逆になってしまっている。

それでも潤は昔のままだし、雅も私も同じだ。3人の間にあるものは何も変わってない。変わらないことがいいことなのか分からないまま変わってない。何が正解か分かってれば今の状況にはいない。

夕食が完成して2人で食べる。料理といえるか微妙なちゃんこ鍋。まあ、実家住まい

の女にはこれぐらいが妥当。話は今やってるテレビや昔の思い出。仕事についてはどう

ちも触れられたくないところだから避けた。

7月24日の夜、千代原靖司の頭。

会社帰り、いつものように仕事終わりの会社員たちが集中する時間帯。電車内はどこ

も混雑し、満員電車の心地悪さを存分に味わわざるをえない。もう

慣れたとはいえ、この不快感はどうにもできない。

終点となる乗り換え駅では全員が押しだされるように我先にと前に行く。乗るかえ先の

電車で座ったり、手すりにつかまるために。座れば寝れるし、手すりにつかまれば

電車が揺れるたびに人の波に揺らされて余計な力を消耗しなくてすむから、ここに勝負

をかけている人も少なくはない。俺はそこには勝負はかけていないけど、扉付近でぎ

ゆうぎゆうにされるのもきついからそこそこの良い位置はとるつもりでいる。

今日も程よくの流れで乗るかえの移動をしていると、自分のところとはまた別の人の

波の中に修子の姿を見つけた。使ってる電車や乗り降りする駅も違うけど、ここで乗り

かえをするのだけは同じでたまに顔をあわせることがある。

向こうもすぐにこちらに見つけ、このまま知らないふりをするわけにはいかなくなった

たので流れを共にはずれる。

「おっす」

「おっす」

ひどくたどたどしい調子になっていた。急な展開と今の2人の微妙な関係性がそうさせた。

「今、帰り？」

「うん。そっちな？」

「ああ」

会話は形式的なものだけで止まってしまった。もっと何でもいいから話せばいいんだ

けどいきなりの対面でうまく言葉が出てこない。せわしく流れていく人の中でここにだ

けは点になった時間が流れている。

「どう？ 元気にしてる？」

「うん。まあ」

「そうか・・・よかった」

これが今できうる最大限の会話だった。

結局、ほとんど中味のないやりとりだけでこっちから離れていつてしまった。言いた

いことはあるはずなのに口をつくことができない。

なんてふがない男だ、そう息をつく。

あんな突発的な状況だったから、そう自分で自分をなぐさめた。

7月24日の夜、柳館修子の頭。

乗しかえをした後の電車は人も比較的少なめで大概是座ることができる。いつもなら

そのまま寝てしまうんだけど、今日はそうはいかなかった。またあのもやもやが頭に出てきてしまったから。

さっきの乗しかえの駅での靖司とのやりとりを思いだす。あまりのつたなさに自分の浮かべておきながらすぐに消したくなる。自分のふがないさに我ながらほとほと愛想をつかす。

不意をつかれたのはもちろんだったけど、それでもそれはいいわけにしかない。

というか、いいわけにはしたくない。あれは明らかに私がダメなだけだった。そう自ら

をいしましめたい。

言いたいことはあったのに。昨日の夜もあんなに考えてたのに。

電話で言うなら、メ

ールで送るなら、直接伝えるなら、いろんなシュミレーションもした。街中で急に会っ

たら、それもその中にはあった。なのに、私は……。

昔はこんなじゃなかった。もっと近い距離にいられたのに。少なくとも、こんな後悔

に苦しみられることになるなんて思いもしなかった。あの純白な世界がずっと続くんだと信じてやまなかった。

出会いは中学生のときだった。中1のときに靖司は父親の転勤で私のいた中学に転校

してきた。ほぼ一目惚れだった。靖司は気さくですぐにクラスの輪に入れたし、集中力

もあったから勉強も運動もそつなくこなしたし、顔もいい方だから寄りつく人は多かつ

た。男子には人望があったし、女子には人気があった。アニメやドラマの主人公のよう

に誰もがうらやむようなほどじゃないけれど、どれを取っても上中の上のランクには

いた。私の知るかぎりでも数人は好意をもってたし、私もその中の一人だった。

初めは淡い片思いだった。恋っていうのをどこから正確なものとして区切っているの

か分からないけど、あれがきっと初恋なんだと思う。幼稚園や小学校のときにも好意を

もつてた男子はいたけれど、思春期というか男性として強く意識したってことでは意味が違う。

毎日ドキドキしてた。授業中、教室の少し離れたところから後ろ姿を見てるだけなのに気持ちが高ぶっていた。嬉しくて、たまに胸がキュッとなった。学校に行くことが楽しくてしょうがなかった。

でも、その思いは表には出さずに胸にしまっていた。気持ちを素直に出すなんて初恋のときにそんな器用にできるわけないし、告白なんてもってのほか。なにより、そっと温めていくことが心地よかった。

ただ、幸いそのまま近くから眺めてるだけで卒業を迎えるってことはなかった。私も

タイプの靖司に似ていたから、私のいる女子グループと向こうのいる男子グループ

は接することが多かった。輪になって話したり、行動を共にしたり。集団で話していると

きにたまに靖司と会話になることもあったり、集団で移動しているときにたまに靖司と隣

で歩くこともあったりして、そんな日にはもう家に帰ってから頭の中で何回も思いだ

しながらにやけてた。2人になることはなく、グループとしてだけで充分すぎる日々だった。

2年と3年ではクラスが別々になったけど、通学や校舎内で会ったときには気さくに

「おっす」と挨拶をしていた。物足りなさはあったけれど、もともと見ていただけで幸

せだったわけだから我慢の範疇だった。結ばれたらとはいくらでも考えたけど、今の状

態が続いてくれれば私は満足だった。

けど、そうもいかない状況が迫ってくる。3年も半ばになると高校受験が現実味をおびてくる。どうしよう、どうしよう。自分の進路と同じぐらに靖司のことが頭の中を占めていた。

私の片思いを知ってる友達にさりげなく靖司の受ける高校とその中の本命をさぐってもらった。靖司の本命は私のレベルよりワンランク上だった。自分の現実との距離を感じずにはいられなかった。

でも、悩んでるヒマなんてない。私はそれまでの人生で経験のないぐらい勉強へ情熱を燃やし、靖司の本命校を受験校の一つに入れた。周りには挑戦のつもりで受けるって言うってたけど私は本命として受けた。

本命校の受験を終え、結果が出るまでのあいだにバレンタインデーがあった。1年と2年のときは渡したいとは思ってたけど自分の思いが伝わってしまうのをおそれやめていた。私はこのままでいいと思ってたからヘタにがんばって関係がぎこちなくなるのは嫌だったから。

ただ、このときは意味合いが違っていた。私が本命校を落ちた場合、春から靖司と離ればなれになってしまう。今の関係はおそらく薄れてしまう。それはなにより嫌だ。なんとかしないといけない。そして、それを後押ししてくれるのにはもってこいのバレンタインだった。

正直、私自身は心がすくんでいた。自分の思いが向こうに伝わっ

ちゃう、これまでの関係でいられなくなる、どうせなら卒業式でもいいんじゃないか、そうありとあらゆる逃げ腰な言葉を並べていた。それを友達が強めにはげましてくれた。伝えなきゃこのまま終わるんだよ、受験がダメだったらどのみち今の関係がなくなるんだよ、ここで逃げたら卒業式でも同じことになるよ、そう背中を押してくれた。

私は靖司に告白することを決めた。受験勉強もあるのに友達が作戦会議をしてくれて、それを元に動くことにした。当日、「渡したいものがある」ってメールを送信。普通に考えて、この日に渡すものなんてバカでも分かる。これを送信した時点でこっちの思いの半分以上は伝わってるも同然。後は最後の勇気を振りしぼるのみ。待ち合わせ場所で立っているあいだも完全に心ここにあらずになっている。昨日の会議で決めたシナリオをひたすら頭にリピートしていく。シナリオといってもごく普通の展開。なのに、そんなことすらどっかに飛んでってしまいそうなくらいのド緊張。靖司が着くと、「勉強中にごめんね」と言いそえる。「これっ」とチョコを渡すと、靖司は察しがついてたように「ああ………ありがとう」とそこまでの驚きは見せなかった。靖司はチョコの包みを開けようとしていない。自然な流れはそこで途切れる。ここで余裕があるなら立ち話、ないなら撤収っていうシナリオ。自分の余裕、なし。撤収。そこから二言三言を言いそ

えて、その場を後にしていく。同行してくれてた友達の待つファミレスに駆けこみ、ようやく緊張の糸が切れた。

結局、私も靖司も本命校に合格していた。険しかった道が開けてホッとする。よかった、あと3年は一緒にいられる。

同時によくないかもしれないことが一つ。自分の気持ちはもう向こうに伝わってしまっている。ここまではいいとしても、こっからどうすればいいんだ。私はすでに告白のゾーンに足を踏みいれてしまっているわけで。でも、これからのことを考えると答えを聞くのは怖い。

登校日には目も合わせられず、そのまま卒業式を迎えた。友達とまた前もって作戦会議があり、当日のシナリオをくんでもらった。私が事前準備がないと何もできない緊張しいであるのは露呈されていたから。そこで決められたのは無理をしないこと。バレンタインのときは状況も変わったので、ここでフラれて高校生活に支障をきたさないようにするのが第一になった。

式が終わってホームルームになるまでのあいだに靖司をメールで呼びだし、校舎裏にスタンバイしてるとまたガチガチになってしまっていた。というより、式の途中からもうなっていた。靖司が着くと、制服の第二ボタンをおねだりする。今日は答えを聞くんじゃなくボタンをもらう名目、それでなんとか気を保てた。ただ、その後の展開が待つ

ていた。ボタンをもらってその場を去ろうとすると声をかけられる。

「答えは言わない

で」と心でとなえると、言われたのは「今度、どっか行かない？」

だった。その後どん

な言葉を言ったかは覚えてない。足が地についてない状態。心に花が咲いている状態。

簡単にいえば、訳がわからない状態。

それからは順調な関係が続いていた。学校では恥ずかしさもあって近づきすぎなか

ったけど、それでも周りのみんなが認識しているカップルだった。

休日にはデートをし

て、そこでは少しずつ距離を近づけていった。こんな幸せがずっとこの先もあることをうたがわなかった。

なのに、その思いは打ちくだかれた。同じ大学にもがんばって入れたけど学部は違う

ので、それまでよりも近くにいられる時間は減っていた。それでもなるべく機会は見つけて順調に付き合っていたつもりだった。

その中で、次第に靖司の感じが変わっていった。外から見てとれるものじゃなく、内

から来るもの。靖司から私に来る思いが薄くなっていってる気がした。でも、それを口

にはしなかった。口にすることで2人の間にそれが明確な意識とされてしまうのが怖かったから。

重なるようにして靖司に他の女性の影が立つようになった。靖司と同じ学部の子で、私も目にしたことがある。そのときは数人の仲のいいグループの一人っていう様子だっ

たけど、友達から靖司がその子と一緒にカップルみたいに楽しげに
してたって報告をさ
れて頭の中が白くなった。よくよく考えると、その少し前あたりか
ら会う回数が減って
いたし、こっちから誘ってもこばまれることもあった。今日中にレ
ポートをやらないと
なんない、友達と遊びに行く約束をしちゃった、そういうしかたな
い理由だったから納
得していたのに。経験したことのない怒りと不安の織りまざった感
情がふつふつと上が
ってきた。

私は靖司に直接問いつめた。このまま抱えこんでたら身がもたな
い。こんな心配した
ことがなかったし、することもないと思ってたから心構えがなかっ
た。私と靖司のあい
だにはこれまでの絆があると信じてたから。もう、靖司のことをう
たがってる自分でさ
え卑しい人間に思えてきて嫌になった。我慢は無理だった。だから、
ちゃんと向かい合
ってたずねた。恋人に浮気の疑いをかけてる時点で2人の信頼関係
は元にはなれないっ
ていう覚悟も決めて。それだけの強い気持ちで向かったせいで私は
途中から涙を流して
いた。この状況の何もかもが嫌で。すると、最初は否定していた靖
司の言葉が止まった。
やがて、「ごめん」と頭を下げられた。今まで築きあげられたもの
が音をたてて崩れて
いった。信じられなかったわけじゃなかったけど、目の前で起こっ
ていることがなにか
自分に対して起こっているものじゃないようにぼんやりした感覚だ

った。裏切られた、そう感じた。出来心でやってしまったこと、今とてつもなく後悔してること、私のことを好きな気持ちは変わらないこと、もう二度としないと誓うから許してほしいこと、靖司がいくらでもと謝っている言葉の全てが私の中をふんわりとただよってポツポツと出ていった。

私に靖司の謝罪を受けいれる余裕なんてなかった。中1で片思いして以来、私の初恋だったし、私の青春だったし、私がしたたった一つの恋だったのに。そこを崩されて、私に寄りかかるところなんてなかった。好きだから、離れたくないから泣く泣く許すなんて選択肢はなかった。あるだけのわずかな力で「別れましょう」と言い去るのが精一杯だった。

その後、靖司は大手商社に就職し、私はごく平凡な一般企業に就職した。向こうの情報は学生時代の友達を通してたまに伝わってくる。順調に仕事してるらしく、いくつか恋愛もしてるようだ。私も普通に仕事してるし、いくつか恋愛もした。ただ、どれも相手から求められたもの。正直、こっちにそれほどの熱はない。

いや、そんな表現じゃ違う。熱が出ないのはこっちの心持ちのせいではない。まだこの心の中に靖司への思いがある。振りほどこうと何度も思ったけれどうまくいってくれない。一度の過ちを許せなかった自分さえ責めている。未練が続いている。確かなこ

とは靖司が好きだということ。

だとしても、関係を修復する術が見当たらない。あれから月日が経ちすぎてるし、浮気をされた側から持ちかけるのは違うだろうし、裏切られた傷は今もまだこの胸の中にあるから。

なら、このままでもいいのか。それは嫌だ。あのなんてことない輝いた日々が忘れられない。あのときに戻りたい。靖司と戻りたい。あそこが私にとって一番心地いい場所なはずだから。

四巡目（後書き）

全六話、本に換算すると85ページになる量です。

五巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

五巡目

7月25日の昼、古武雅治の頭。

ああ、頭いてえ。体だりい。

昨日の酒にズシンと体を重くさせられている。目がさめてからしばらくたってるけど

意思に体がついてこない。起きあがろうと思っても引力が増したように言うことをきかない。

今日が仕事が休みなのがせめてもの救いだ。っていうか、今日が休みだからここまで呑んでしまったっていうのもある。自分で自分の首をしめたようなもんだ。こうなってやっと思かさを知る。

ただ……昨日はそれでもいいと思った。

俺もいい年だ。自分の限界点ぐらい分かってる。ムチャをして、翌日にこの状態をむ

かえることもぼんやりと想像できていた。その上でそれを自らこえていった。バカなわ

けじゃない。正確には、常人の判断でバカになることを選んだ。その辛さより優先すべきものがあつたから。

昨日の夜、塾終わりに近くのスーパーで買物してるところを野倉先生に声をかけられた。急だったのもあつたし、そんなこと初めてだったからビックリした。昨日は授業中にあんなことがあつたからなおさらだったかもしれない。

こっちの心境はおかまいなしに野倉先生は笑顔まじりに喋っている。呑んでるビールが一緒だとか食べてるおつまみが一緒だとか。さっきのことなんてまるで無かったみたいに顔をほころばせている。それが不思議だった。理解が追いついてくれず、適当な返事にしかない。

「よかったら一緒に呑みに行きませんか」

そう言われたとき、理解の不能はピークに達した。何がどうなっ
てそうなったんだ。

経過の認識が間に合っていない状態だからまったくもって分からない。
思考の矢印がどこへ向かえばいいのか迷っている。

結局、流されるがままに居酒屋へ行くことになった。行くこと自体には何も悪いことなんてない。むしろ、嬉しすぎる。こっちから頭さげてでもおねがいしたいのに向こうから言われるなんて。こんなことあっていいのかっていう世界。だからこそ、疑心はうまれ
てくる。

こんなとき、予想は得意のネガティブの方にしか行ってくれない。
こうやって俺を油

断させといて、さっきの仕返しに「てめえ、ふざけんじゃねえぞ」

「生徒の前で恥かかせやがって」「何様のつもりだ。おめえ、そんなに偉いんか」とか
キレられるんじゃないか

いか、吞ますだけ吞ませてベロベロにしてゴミ捨て場に放置してく
んじゃないか、俺の醜態さらす姿を撮影して仕事場の人たちに見せびらかすんじゃない
か、そう不安にしか

なっていない。

警戒心を抱きながら慎重に呑む酒はいつもより美味くなかった。味に変わりはない。

単なる環境の違い。いつもは家で部屋着で一人きりでリラックスした状態なのに、今は

外でスーツで女性と二人きりで緊張した状態。こんなシチュエーション、俺にはめったにまわってこない。

ただの疑心暗鬼かもしれない。本当はめっちゃ喜びたい。でも、この心の多くを占領しちまってるネガティブが受け入れようとしてくれない。お前にこんなことが起こるはずがない、何か裏があるに決まってる、後で苦しみが少なくなるようにそう仕向けてくる。

俺が勝手な葛藤をしているとは知らずに野倉先生はどんどん喋っていく。女性は会話が途切れることがないほどマシンガントークをするというのが本当の

ようだ。話は現在の境遇についてを軸にその近辺を行ったり来たりという感じ。三十路前にして同じ職場の契約社員って共通点があるし、同い年だから歩んできた世代もかさなって話は合った。

といっても、俺は完全に聞き役。喋りたおす野倉先生からたまに飛んでくる質問になんとか流れをくずさないように答えるのがやっとだ。

流れは終始野倉先生にあった。劣等感のかたまりの俺が上に立てるわけなどないんだ

けど。野倉先生は顔もかわいいし、スタイルもいいし、男性経験も結構あるだろうし、

なにより契約社員といっても市橋塾の前に普通に就職していたわけだから俺とは立っている階段が全然違う。しかも、前の会社を辞めたのもクビではなく上司からのセクハラに耐えられなくてらしい。

そんな状況を続けていくうちに酔いがまわってきた。野倉先生は酒に強く、同じペー
スで呑んでいたこっちはだんだんと良い気分になってくる。それまで制御していた壁がくずれていき、野倉先生の饒舌に乗っかるように愚痴を吐きだしていった。社会への愚痴、仕事への愚痴、世間への愚痴、女への愚痴、過去への愚痴、あとあらゆるものと嘆きつづけた。

自分の言ってることへの認識はあった。普段ならまず友達以外にこんなことは話さないだろう。なのに、言いたい放題にぶちまけていた。多分、溜まり溜まったものを誰かに聞いてほしかったんだと思う。

そのときの野倉先生の反応は思いたせない。自分が言いちらしたこともおぼろげにしか思いたせない。家まで帰ってきた道中の記憶もなんとなく。点々が転々として気持ち悪い。

記憶を呼び起こそうとするけどあきらめざるをえなかった。どうにも思いたせないし、この先も思いたせない。野倉先生に対して失礼をしたかもしれない覚悟もしないとならない。

息をつき、勢いをつけて体を起こす。携帯を確認すると受信メー

ルがあつた。開いてみると、それは野倉先生からのものだった。

『おはようございます。昨日は酔ってたけど大丈夫ですか？　こっちもいつもより呑んでしまつて頭が痛いです。今日は体を休めます。じゃあ、また明日よろしくおねがいします』

文面どうのよりも、どうして野倉先生は俺のアドレスを知ってるのかの方が気になった。調べてみると、こっちの携帯にもいま送信されてきたアドレスが登録されていた。つまり、連絡先を交換したってことになる。一体、どうやって。もお、どうなってやがんだ。

7月25日の昼、野倉智枝美の頭。

『おはようございます。昨日は酔ってました、すいません。何か失礼なこととかしてなかったですか？　こっちも体がだるいので今日はちゃんと休めます。明日もよろしくおねがいします』

古武先生から来たメールはなんてことない普通の文面だった。適当な返信をかえしておく。

打ちおわると携帯を放るようにしてベッドに横になる。体には脱力感が居座ったまま離れようとしてくれない。暑さでほぼ下着の状態だし、こんなところ他の人には見せられ

ない。

酒にはそこそこ強い方なんだけど少し呑みすぎた。友達以外との酒の席ではそこまで

いかないのに昨日はそれでもいいと思った。なんというか、古武先生に対してはいいや

と思えてしまった。良い意味でとらえるなら気を許せたってことで、良くない意味なら

緊張感がないってこと。

前の会社の酒の席では上司からさんざんなセクハラをされて何度も殴ってやりたいと

感じてきたから親しい関係の異性でないと警戒心が自然とはたらく。なのに、昨日はそ

うならなかった。最初はそれなりにかまえたけど、途中からは壁を取りはらっていた。

自分の中に溜まってたものを吐きだすように喋りまくり、募ってくるイライラを流すように呑みまくっていた。

古武先生はそんなに酒に強くないようで量はいかなかったけど、私がとにかく呑ませ

た。私が壁を取りはずしてるんだから向こうにもそうしてもらわないと気がすまなくな

って。だんだんと古武先生も様子が変わってきて、最後にはスパークしていた。私と同じよ

うに、今いる環境や今ある現状への愚痴を吐きだしていった。私の愚痴とも重なる部分

は多かったから共感できたし、普段あまり目立たないタイプの人が本音をさらけだして

くれたことは嬉しかった。

古武先生の過去は外見の冴えない印象を濃く映した感じだった。

学生時代から今と変

わらずクラスの輪の端の方にいる薄い生徒で、これといった逸話や面白話もなかった。

就活では就職にありつけず、そのままだらと今の状態に至って
るらしい。勉強はま

あまあのレベルだったけど、恋愛についてはいまだに女性経験がな
いという予想を裏切

らないものだった。モテないだろうとは思ってたけど、付き合ったこ
ともないとはさすが
にずいぶんなものだなあ。

引いたところはあるけれど、それ以上に好感があった。現在の置
かれてる立場も似て

るし、あくまで過去は過去。武勇伝をひけらかすやつなんかより、
そんな屈辱をちゃん

と口にする勇気がある人の方がいい。この年齢にもなれば外見より
中身の大切さを分か

っている。自分のルックスにおぼれて格好つけてるやつは寒気がす
る。こっちから願

下げだ。

正直、これまで付き合ってきたのはそういう男性が多かった。若
かったのもあって、

自分の横にいて周囲の目に対して安心できる外見は必須条件だった。
バリバリに働き、

将来の出世も見こせる理想的なポイントも押さえれば望ましい。

ただ、そういう男は

プライドが高いのもいなめない。ケンカも絶えず、負けることが嫌
いで口論になっても

意地で引こうとせず、挙句にこっちから謝らないとならないめんど
くさが面倒で別れ

ることもしばしば。ママにおもちゃ買ってもらえずに駄々こねる子

供かよ。大人なら中
身も大人になれよ。

そういう疲れる男には飽き飽きしていた。必要以上に高い位置に
自分を置こうと足を
伸ばしてる分、こっちも背伸びをしないといけないのはもういい。
地に足がついた恋を
したい。

昨日の呑んでいるときにふとその感覚が思いうかんだ。この感じ、
なんかいいんじゃないかって。今までの相手との違いの大きさにはとまどいこそある
けど、それこそ私が
取っばらいたいと思ってるものなんじゃないかって。そう思って、
アドレスの交換を申
しでた。最近ちょっと恋愛してなかったけど、ここは思いきって一
歩を踏みだしてみよ
うかな。

7月25日の夕、桑畠潤蔵の頭。

今日もこれまでより少し遅い時間に目がさめた。当然、昨日と変
わらない状況が待っ
ている。日が変わったら自分のいる状況が良い方向へ突然変わって
いるなんてうまい話
はあるわけない。

今日も気が落ちる一日のままだ。昨日と同じように買っておいた
コンビニのおにぎり
とインスタントの味噌汁を朝食にし、掃除と洗濯をする。わずかば
かりの心のほぐれに
はなった。

それが終わると時間はぽっかりと空く。本当はすぐにでも就活に励むべきなんだろう

けど、まだそこまで心持ちを上げるほど傷が癒えていない。かといって、またパチンコ

で気をまぎらわすのも選びづらい。その時間は傷を忘れられるけど、忘れただけでまた

戻ってくる。他の娯楽も同じだろう。第一、一人きりで楽しさを味わうことは淋しさもまた生む。

どうしようかと思った結果、実家に帰ることにした。なんだか負けて帰る感覚で嫌でもあるけれど、両親を悲しませてしまってるだろうから顔だけでも見せたい。就職しては喜ばせ、クビになつては悲しませての連続。親孝行か親不孝かなら、安定していないということでは親不孝になるだろう。

事前に帰る連絡はしておいたから母親に温かく迎えられた。一人っ子で甘えられて育ったので柔な性格になり、打たれ弱さは両親も分かっているのでこういう状況になってもとりとめて厳しい言葉を突きつけられたりはしない。

出された麦茶を飲みながら軽く話をする、その後は自分の部屋に入った。この家を出てから数年になるけど、そのときの状態で今もある。他に特にといって使う用途もないからでもあるけれど。

ベッドに寝転がりながら過去に思いをめぐらせていく。ここに来ると学生時代の懐かしい思い出がよみがえってくる。パツとはしないし、派手さもないけど、それでも自分

にとつてはかけがえのないものだ。

その中で中心になるのは雅と信枝との思い出だ。物心ついたときにはもう一緒にいたからずいぶん長い付き合いになる。良いことも嫌なことも全てが今は宝物といえるものになっている。

あの頃に戻りたい、そう切に願うこともある。決して輝いてたわけじゃないとしても楽しかったから。もうあの時間は過ぎせないんだなと思うとやりきれない気持ちになってしまう。大人になるって、現実を受けとめていくって、過去から離れていくって切ないな。

郷愁にかられながら過去に思いをはせ、眠りにつくこともなくただ時間が過ぎていく。時を止めることはできないし、戻すこともできやしない。結局、この現実と未来を生きていくしかない。きっとこの先も輝きなんてないだろう道を歩いていくしかない。それをどう生きるかは自分次第。

部屋を出てリビングに戻ると母親は夕食の支度をはじめていた。何十回、何百回、何

千回と目にしてきた後ろ姿。昔と比べると、心なしか気持ち縮んだようにも思える。自分が成長したこともあるし、親も年齢をかさねてることもあるだろう。台所の窓から映る夕日がかかることでさらに愛おしく感じていく。楽しい一日があっても悲しい一日があっても帰ってくれば変わらずにそこにいる後ろ姿。

「手伝おうか」と言うと、「いいよ」と柔にこぼまれる。それで

も「手伝うよ」と言

うと、「じゃあ」とたのまれた。小さいころはよくこうして並んで手伝いをしていた。

夕食のメニューが分かるのも嬉しかったし、だんだん形になっていくのが楽しかった。

あの日々もまた過去のことと、もう戻ってくることはない。なんで成長するのってこんなに切なくなきやいけないんだろう。

「母ちゃん」

「んっ、何だい」

「・・・・・・ごめんな」

「どうしたんだい」

「いや、迷惑かけてるから」

「バカだねえ。何も潤蔵は謝ることなんかしてないだろ。一生懸命やったんでしょ。」

それでいいじゃない」

「・・・・・・うん」

言葉にはしなかったけど涙が出そうなほど嬉しかった。こんな自分にも愛情をそそいでくれる人がいる。迎えてくれる家がある。

7月25日の夜、浜森信枝の頭。

「うっす」

「うっす」

桑畑家を訪れると潤にむかえられた。上がらせてもらうと昔のままの懐かしいニオイがして心地よかった。家の中の様子も特に変化がなくて嬉しかった。小さいころはよく

遊びに来てたけど、潤が一人暮らしをはじめてからは上がるほどの用事もなかったからずいぶん久しぶりになる。

潤から今日は実家に帰るっていうメールが来てたから顔をだすことにした。まだ元気

ないだろうからちよっと話すぐらいのつもりだったけど潤に上がるように言われ、おば

さんにも会いたいと思ってそうした。リビングであいさつすると今度はおばさんに夕食

を食べてくように言われる。親子水いらずに割ってはいいるのなと思っただけ潤がウエ

ルカムな感じだったから断らずにそうさせてもらった。

食卓にならんだのは、白飯、豆腐の味噌汁、レタスとハンバーグ。全員の用のおかずと

して、おしんこ、ごはんですよ、きんぴら、大根の煮物、揚げ餃子。潤の好きなメニュー

だった。味はバツグン。おふくろの味ってやつ。

話は昔の思い出がほとんどだった。バカみたいに遊びまわって、めいっばいに無茶や

ってたから話が尽きることもなくにぎやかに時間が過ぎていく。おばさんのおかげか、

すごくいい空気だった。

遅めにおじさんが帰ってくると、あいさつをして私は帰ることにした。すると、おば

さんが潤に私を送るように言う。私の家、すぐ近くなのに。昔の感覚が残ってしまっ

るらしい。

潤の家を出ると、夜でも嫌ななまぬるさが覆ってくる。こんな時間なのにまだ暑さが

ただよってくれちゃってさ、親切のかけらもない。シャボン玉みた

くパンって消えない
もんな。

「よかったなあ、おじさんとおばさんに会えて」

「うん。楽しかった」

「久しぶりに子供のころに戻った感じだった」

「ああ、懐かしいね」

「あの頃に戻りたいなあ」

「うん……そうだね」

何気にこぼれた一言だったけど、潤の言葉には空白がうまれていた。多分、潤もそう
思っていたんだと思う。そう願ったところでかなわない思い。だからこそ、より愛おしくなってくる。

「……大丈夫？」

潤の傷口に手をのばす。そこに軽々しく介入しちゃいけないのは私がよく分かってる。

社会の波からはじかれる心の痛みはきつい。やりきれない焦燥感や孤独感との戦いが常に待っている。

「うん。大丈夫だよ」

潤の言葉に今度は空白はなかった。吹っ切れたようには見えなかったけど、沈みこん

でいるようにも感じなかった。私が予想してたよりかは良い方へ回復してるみたいだ。

やっぱ、実家と親のぬくもりってすごい力あるんだな。

それに比べて、自分はいつまでも傷をかかえたままにいる。前に進むどころか、傷口

を隠してる。治すことから逃げている。実家にいて、親の世話になっただけのま湯につかっている。

すごいよ、潤。私には潤がまぶしく見えるよ。

7月25日の夜、千代原靖司の頭。

家に帰ると真っ暗な部屋が待っているのには慣れた。家族のいる部屋も明るくていいけれど、誰もいない部屋も落ちつけていい。自分のペースをフラットにたもっておける時間はほしい。

ただ、たまに無性にさみしくなるときがある。温かい空気を欲し、声を欲し、心を欲してしまふ。そんなとき、誰かにそばにいてもらいたくてたまらなくなる。心の隙間をうめてほしい。

そして、その「誰か」が特定の一人を示してるのも自分でよく分かってる。そうだったときに必ずうかぶのは修子だ。これまでに恋愛をしてきた他の女性はその奥先にしかうかばない。

修子は本当にいい子だった。年上のような母性で見守ってくれたり、同じ目線ではしゃいだり、年下のような甘えかたでじゃれてきたり、女性に求めたものの多くをもっていた。男をたててくれたり、いつまでも恋愛感覚を失わずに心を近くにいてくれたり、とにかく俺との関係を温かいものでいさせてくれた。こんなに素敵な子は後にも先にもいなかった。

なのに、俺が裏切ってしまった。大学のように親しくなった同じ

学部的女子に手をだしてしまった。向こうからの好意になんとか察しはついていて、モテているっていう事実には浮かれていた。学部の中の良い数人の男女で呑んだとき、酔った勢いで向こうのモーションに気をゆるめてしまった。

結局、その後も関係が続けていく。自分のしていることは分かっていた。心が動じてしまったのは性欲だった。修子と違って、その子は男性経験が多くて行為がなめらかで俺の味わったことのないプレイまでしてくれた。その魅力に完全にやられてしまった。男の情けなさのかぎりだ。

黙ってりゃなんとかなるだろう、そう軽く思っていた。でも、そうしないうちにバレてしまった。純粋な思いをだますような悪いことをしてる人間にはきつちりと天罰がくだる。

ただ、代償があまりにも大きすぎた。修子からは別れを切りだされた。自分のやったことを軽く見ていた分、その言葉は意外だった。その言葉で今まで浮ついてた心が現実にとえバレても、まっすぐな修子だったら反省を見せれば許してくれるだろうと。その安易な考えは簡単に目の前の壁にはねられる。まっすぐだからこそ、裏切られた事実が重くのしかかってくけなかった。

その後、修子の情報は学生時代の友達を通してたまに伝わってき

ている。順調に仕事

してるらしく、いくつか恋愛もしてるようだ。こっちも普通に仕事してるし、いくつか

恋愛もした。ただ、どれもそれほどの熱がわからない。

いや、そんな表現じゃ違う。熱が出ないのはこっちの心持ちのせいでしかない。まだ

この心の中に修子への思いがある。振りほどこうと何度も思ったけれどうまくいってく

れない。一度の過ちを犯してしまった自分を責めている。未練が続いている。確かなこ

とは修子が好きだということ。

だとしても、関係を修復する術が見当たらない。あれから月日が経ちすぎてるし、浮

気をした側から持ちかけるのは都合がいいだろうし、裏切ってしまった思いは今もまだ

この胸の中にあるから。

なら、このままでいいのか。それは嫌だ。あのなんてことない輝いた日々が忘れられ

ない。あのときに戻りたい。修子と戻りたい。あそこが俺にとって一番心地いい場所な

はずだから。

それだったら行動を起こさないとならない。向こうが近づいてきてくれるのを待つな

んで展開は通りはしない。昔は向こうからアプローチをしてくれた。今度はこっちから

思いを伝える番なんじゃないのか。

そう自分へ言いきかせ、携帯を手にした。

7月25日の夜、柳館修子の頭。

携帯を手にとると驚きとともにとまどいが生じた。

着信には千代原靖司とあった。登録を削除しないまま、何年もそのままにしておいた名前。

それがどうして今になって。もうそこそこ深い時間なのに。

昨日、駅で擦れちがったときに何かあったんだろうか。いや、何もおかしいことなんてないはず。

頭の中に思いつくかぎりの事態をならべていく。そんなことしたって現実は何も変わりはないなんてこと、こんな状況では出てきてくれはしない。

この間、わずか数秒。人間の普段は使われてない頭脳っていうのはこういう場面で発揮されるものなんだろう。

ようやく携帯の通話に踏みきる。精神は落ちついてないけれども、こうなったら行くしかない。

「もしもし」

「もしもし。俺だけど分かる？」

「うん。分かるよ」

そりゃ分かるよ。ブランクがあるっていつても、今までにどれだけ電話で声を聞いてきたことか。

「今、大丈夫？」

「うん。全然」

「あのお……なんていうか」

電話口からため息まじりのためらいが来る。一体、その後に何があるのか分からなくてドキドキしてくる。それは私にとってプラス？ マイナス？

「どうしたの」

「そのお……週末とか空いてない？」

「えっ」

それ、どういうこと。まさか、お誘いの電話なの。そうだとしたら、それは何のため

なの。私にとってプラス？ マイナス？

「ダメかな」

「いやっ……いいけど」

どういう展開なのか、現段階では見えてない。でも、とりあえず私に断る理由はないのはそうだろう。

結局、詳しい日時はおいおいてことで電話は切られた。

これはどういうことなんだろう。その後もしばらく正解の分からない考えをつづけていた。

五巡目（後書き）

全六話、本に換算すると85ページになる量です。

六巡目（前書き）

○登場人物

古武雅治・ふるたけまさはる（29歳、女性に対してコンプレックスのかたまり）

野倉智枝美・のくらちえみ（29歳、良い女だけど男性に不信感を持っている）

桑島潤蔵・くわばたじゅんぞう（29歳、社会適応力が少なく会社を転々してる）

浜森信枝・はまもりのぶえ（29歳、フリーターで将来への希望も特にない）

千代原靖司・ちよはらやすじ（27歳、過去の恋愛の傷を振りきれられない）

柳館修子・やなぎだてしゅうこ（27歳、過去の恋愛の傷を引きずっている）

六巡目

7月26日の夜、古武雅治の頭。

天国なう。

授業も終わり、講師用のデスクで雑用をすませている時間は何気に悪くない。仕事中

ではあるけれど、これさえ終われば家に帰れるし、学生のようにガヤガヤやかましくない資料が相手だし、冷房のきいた空間にいられる。

そのとき、携帯のバイブ音が聞こえた。見てみると、野倉先生からのメールの着信が表示されている。そういえば、さっき野倉先生がデスクを離れていくのを見た。トイレだろうと思っていたけど。

『どのくらいで終わります？』

この文章には色恋沙汰には縁のない俺にでも読みとれるものがあった。先の展開を予測

するだけで胸を感情がうごめいていく。すぐに仕事中であることに意識は戻り、なんとか取りつくろう。

『そんなにはかからないと思います』

返信をすると、携帯をしまうより先にリターンが来た。

『この後、一緒に吞めませんか？』

やっぱりの展開だった。再びうごめきだす感情を周りにバレないようにおさえる。

『大丈夫です』

断ることなんかまったく考えなかった。数日前に痛い目をみてる

ことはもちろん認識

のうえで。それよりも女性と二人きりで会えること、二度目の誘いをしてもらえたこと

の喜びの方がはるかに上回っていた。しかも、こんな俺が野倉先生みたいな人から。良

い気にならざるをえない。

『じゃあ、あのスーパーにいますね』

リターンの後、少ししてから野倉先生はデスクに戻ってきて、荷物をまとめて帰って

いく。帰りぎわにこつちを一度見てくれた。視線の流れの中にも意識があったような気がしてよかった。

その後、はやる気持ちをおさえながら雑用を終わらせて塾を後にする。夜でも外界に

はモワツとした嫌な空気がながれていたけど、今はそれもこれからの出来事の二次で

しかない。俺にはこれから楽しいことが待っている。これまでの人生にはなかった未知の領域が。

スーパーに着くと、アルコール飲料の売り場に野倉先生はいた。

新商品があったよう

で説明をしてくれていたけど正直そんなものはどうでもよく、たいして耳に入ってこなかった。

スーパーから居酒屋に移動すると、流れは前回と同じようになった。野倉先生はどん

どん呑んでいき、まだあったのかっていうぐらいにマシンガントークを続けていく。唯

一違うのはこつちには無理に吞ませようとはしてこないこと。俺の許容量を察してくれ

たようだ。

野倉先生からの話をなんとか聞き、たまに返答しながら頭の片隅では考えることがあった。今さらではあるけど、どうして俺をこうして誘ってくれるのかということ。単純

に考えれば、俺みたいな男が野倉先生みたいな女に誘われやしない。こっちは今まで女

性と付き合ったことさえない敬遠されるべき男で、向こうは今まで俺なんかをはるかに

しのぐ男どもと付き合ってきたであろう高嶺の花。それが一体どうしてこんな状況にな

っているのか。良い男に慣れてしまっただけで物めずらしさでか、恋のいろはも知らないやつ

に一から教えていきたい征服感に満たされる恋がしたいのか、それとも単に俺をからか

ってるだけなのか。ええい、正解はどれなんだあ。全然わからんつ。そんなこんなを続けること3時間。俺の頭には何一つこれという

結論に達するものはなかった。野倉先生は結構な量を吞んでいたが、こっちもそこそこ

に吞んでいてなんとか自分を保っていられるぐらいになっていた。

そろそろ終電のこととも考える時間に差しかった。このままでは止まることなく野倉

先生は喋りつづけそうなので、区切りをつけることも込めてトイレに立つ。結局、意図

はよめなかったけど女性と二人きりの時間は無条件にいいものだった。

良い気分にはいたりながら戻ると、野倉先生がテーブルで寝てしまっていた。厄介だな

あと起こそうとすると反射的にその手を止め、自分の席に座ってそ

の姿を眺めた。そう、こんな機会はめったにない。チャンスじゃないか。そう思い、野倉先生を眺めていく。

こんな近くで女性の姿をじっくりと目にするなんて初めてだ。女性の髪、女性の寝顔、女性の肌、女性の胸、女性の足。興奮をおぼえながら不自然にならないように視線を向けていく。

そのうちによからぬ考えも当然わいてくる。触りたい。あの体に触りたい。そう思うのはこの状況の中であまりに自然なことだ。でも、そんなことやっ

ていいわけがない。でも、寝てるんだからちよつとぐらいいんじじゃないのか。でも、バレたら一巻の終わ

りじゃないか。でも、こんな気持ちになって何もなしでいろつていうのか。家に帰って

アダルトビデオでなんとかしろつてのも残酷じゃないのか。だって、今ここに生身の女がいるのに。

「何もしないんですか」

寝ていると思っていた野倉先生からの言葉だった。こっちの心情を見透かしたような

言葉に驚く。言葉の後に野倉先生は目を開き、こっちへ顔を向ける。

「ちよつと鼻息あらなくなったから何かされると思いました」

やっぱり、こっちの動揺は見透かされている。

「いやっ……」

なんとか否定しようとするけど的確な言葉が出てこない。やましい思いを当てられて焦ってる。

そのとき、行き場のない両手をそつと覆われる。野倉先生はこっ

ちを見つめて口角を
あげている。

「ちゃんとやってくれたらさせてあげますよ」
はあっ。何だ、それ。マジわかんねえ。何がどうなってこうなっ
てんの。こんなの、
恋愛初心者の俺に理解できるわけがねえ。

「何をしてほしいですか」

はあっ。何ってどういうこと。何か言ったらさせてくれるってこ
とですか。まさか、

この期におよんでダメされてるなんてことないよね。だって、別に
俺をダメしてどうも

こうもなるわけじゃないし。そんなら、これって本当に何かさせて
くれるってことか。

何がいい。何がしたい、俺。

「・・・・・・キスしてほしい」

言った。言っちゃったよ、オイ。もう後戻りできないぞ。でもさ、
ここまでされちゃ

って何もしない方がおかしいだろうが。その唇が、その「何をして
ほしいですか」って

挑発的な唇が欲しいですっ。

「分かった。してあげる」

ええっ、マジですか。ってか、この展開は何なんだ。俺に良い風
が来すぎてないか。

まさか、明日にとんでもない目に遭うとか。それとも、あまりに惨
めすぎる俺に見かね
た神様が恵みくれたとか。

つつうか、そんなもんでもいいわい。この状況に集中しろ。
こんな二度とあるか
ないかの状況に。

「ここじゃなんだから」と居酒屋を後にするとただ歩きだす。前

を歩いていく野倉先

生の後ろを何も聞かずに着いていく。どこに行くのかは気になったけど、なにか言葉を

発することでこの奇跡的な状況が寸断されてしまうようでこわかった。そんなことない

だろうけど、それだけ俺にはこの状況が斬新すぎた。

電車に乗って2つ目の駅で降りると、またどこへ行くかも分からないまま歩きだす。

気分よさそうに鼻歌まじりに前を歩く野倉先生とは逆に、こっちは気が気じゃない。い

つ嘘と言われてもおかしくないような状況にとまどいながら鼓動は通常より忙しくなっている。

駅近辺を抜けたあたり、人の通りがあるかないかというぐらいの道まで来ると今まで後ろを見ることがなかった野倉先生が急に振りかえり、俺の手を取ってグッと引いた。

建物と建物の間の道でも通路でもない狭いところへ連れこまれ、目が合うといきなりキスされた。あまりの不意打ちに何も出来ずにただ立ちつくすだけだと数秒で唇は離れていく。

「すいません。我慢できなくて」

微笑みながらそう言った野倉先生はなんとも素敵だった。ちくしように、かわいいじゃねえか。我慢できない、ってどんだけ性欲あふれてきちゃってんのさ。これって、もしかしてもしかするんじゃない。

そこからまたいくら歩くと、着いたのは野倉先生の家だった。それを聞かされると、

異様な感覚が体の中に芽生えてくる。興奮をかくすのがやっとだった。

家の中へ入ると興奮はどんどん上がっていく。女性の家に2人きりなんて人生初めてのケースじゃねえか。やったよ、俺。俺もついにこんなところまでステップアップしたんだよ。

そう感慨にひたってるうちに野倉先生からキスされる。しかも、今度はさっきみたい
な数秒の唇を合わせるだけのものじゃなく、いつまでももってぐらの舌をからませるもの。吐息をもらしながらの相手を欲しがるキスは刺激が強すぎたけど、こんな機会を逃してなんかいられない。こんなことはもう二度とないんだっていうぐらいの気持ちで欲していく。

長いキスを終えると2人とも息を多少切らしていた。目の前の野倉先生の表情はなんともエロかった。

「次は何が欲しい？」

言葉まで完璧エロくなっている。これは嘘でもダメされてもいない。こうなったら、行くところまで行ってやる。

7月27日の朝、野倉智枝美の頭。
はあっ。

古武先生が帰った後の静かな部屋で大きく息をつく。
なんだか無性に疲れた。久しぶりに男の人を家に入れたし、久し

ぶりにセックスした

し、久しぶりに他の人に料理も作ったからなあ。

でも、悪くなかったな。古武先生は気をつかってくれたし、あれこれ言わなかったし。

まあ、こういう状況に慣れてなくて萎縮しちゃってたんだろうけど。行動や言動からも読みとれたし。

古武先生は常に緊張してる感じだった。女性経験ないからそうなってしまうのは分かってたからなるべくこっちからも気にかけた。セックスも男性のプライドに傷がつかない程度にリードしてあげたし、わざとらしくないぐらいに感じてるふうにしたし、やってほしいっていう行為は全部やってあげた。それ、アダルトビデオの知識だろっていうのも一応。

ただ、本当にしばらくぶりだったからこっちもかなり気持ちよくはなれた。前の会社でセクハラされてるうちに男の性欲ってもんが嫌になってたから。

古武先生は経験が浅

い分、そんな強情になるようなこともないなと思った。だからこの人にしよう、そう思った。

まっ、当分はあの人でいいだろう。自信過剰な男は飽き飽きだから、こっちの言うことを聞いてくれる弱っぽい男も経験してみよう。上の立場になるっていうのもなんか悪くなさそうだし。

7月27日の夜、桑畠潤蔵の頭。

打ちのめされた。

何なんだ、このモゾモゾした気持ち。悔しさの煮えきらない感じ。いつそ、悔しいか

悔しくないかのどっちかにしてほしい。

新しい会社の面接を受けた。結果は聞くまでもなかった。これという手ごたえもなかったから。

こっちの話に対しての相手の興味がほぼゼロ。聞いているのは面接官という自分の役割のため。まあ、こっちも対策本をなぞらえたような言葉しか選んでないから反論もしにくいけれど。

それでも、必死に取り組んだ対策だった。これって長所もないし、社会への適応力も少なめなダメな自分なりにやったつもりだった。だから、あれだけ無関心にされるのはつらかった。

就職してはクビ、それを繰り返してるのは特に響いてるだろう。何回もそれを続けてるのは欠陥があるととらえられてもしかたない。っていうより、実際そうだ。会社側には悪い印象でしかない。

あとは年齢のこともあるだろう。三十路前の欠陥のある人間よりも新卒の若者を普通なら選ぶ。

正直、面接に落ちるのは自分を否定されてるようで居たたまれない思いになる。その会社にならなかっただけ、そう前向きにとらえる人もいるだろうけ

ど後ろ向きに考えて
しまう自分には無理だ。

でも、あきらめられない。ボコボコに打たれても、心を折られても引き下がるわけにはいかない。

一昨日、実家に帰ったときに決心がついた。もうこれ以上、みんなに迷惑をかけられない。父親、母親、潤、信枝、こんなダメな自分を見守ってくれる人たちを裏切ること
はできない。みんなを悲しませたくない。みんなに心配かけたくない。みんなを笑顔にしたい。

そう心持ちを保たせながら帰っていると携帯の着信があった。送信者は信枝で、電話にでるとなるべく早くの帰宅を命じられた。こっちも会いたいと思ってたからちょうどよかった。

7月27日の夜、浜森信枝の頭。

「うっす」

「うっす」

帰宅するように言うと、潤はそこで帰って来た。ちょうど最寄り駅あたりまで来ていたようでタイミングがよかった。

家にあげてもらうと、潤はスーツの上着だけを脱いで2人分のりんごジュースを用意してくれた。子供の頃の2人の共通の好きな飲み物。お互いの家に遊びに行ったときは

親が出してくれたもんだ。

「今日……どうだった」

こっちの用を聞かれる前に先に切り出した。この答えは聞いておきたいから。それに

よって、私の居方も変わってくる。

「まあね、ダメだったよ」

「……そうか」

今日、潤が新しい会社の面接に行ったのはメールで知らされていた。正直、そこまで回復してるなんて思ってたからビックリした。一昨日、実家には和やかな雰囲気はあったけどお婆さんのいる手前ってこともあるからかなって思ってたから。まさか、昨日の今日でここまでになってるなんて思いもしなかった。何があつたんだろう。これまでにクビになったときにはこんな早く回復してなかったのに。でも、それを聞くのはやめておこう。

「潤、大丈夫？」

「うん。大丈夫」

心配すると何事もなさそうに潤は返してきた。

「大丈夫？」

もう一度、聞いた。潤がどんなやつかは私には分かってる。言葉の裏側に何かがあるかもしれない。

見た目には回復してるようにしてても本当はどうかは分からない。人間、そうそう奥底から変わるもんじゃない。だから、きっと隠してる。傷を隠しこんで懸命に進もうとしてる。

私がいつもより真剣に言葉をかけてるのが伝わったように、潤は息をついてこっちを見た。

「頑張れ、って言ってもらっていい？」

切実な感情がひびいた。潤の今の気持ちの複雑さは充分に。痛い思いをかかえながら戦ってる姿が心にグツと刺さった。

潤に近づき、唇にそっとキスする。唇を離すと、潤は定まらない表情をしていた。右手でゆっくり潤の髪をなでながら瞳を見つめる。

「頑張れ、潤」

ささやくように、それでいて芯のあるように強く伝えた。周りに人がいたとしても潤にしか聞こえないぐらいの声で。

7月28日の昼、千代原靖司の頭。

ここ最近で類を見ない緊張の仕方だった。鼓動が早まって、体の中を嫌な感覚が占めていく。仕事の接待でもそれなりに緊張するけどそれとはまた別モノな、ずいぶん久しぶりの感覚だった。

それは何だろうと考えているうちに答えに結びつく。中学生のとき、あのまだ何も知らないウブな少年時代の心の揺れるもどかしさだった。

初めて異性とデートしたとき、今では不思議なくらいの張りさけそうな胸の高鳴りを感じていた。初めて手をつなぐとき、初めて唇を合わせたとき、初めて体を重ねたとき、

それはどれも修子との思い出でもあった。

俺の青春時代の恋の思い出は全て修子とともにある。どれもこれも懐かしく淡く素敵な良い思い出ばかりだ。かけがえのない、何にも取り替えようのない、この先も褪せることのない思い出。

それを俺は軽い気持ちで壊してしまった。ずっと真っすぐでいてくれた修子の思いを折ってしまった。許されることじゃない。だから、俺はきびしい罰を受けた。何年間も自分をとがめた。

修子のところに戻る資格はないと考えたし、他の女性とも付き合ってきた。でも、いつも着いてしまうのは過去の恋愛だった。忘れることはできなかった。上書きすることもできなかった。

時が経って、ようやく決心に辿り着いた。定まらない悪循環のループから抜けだす方法は一つしかなかった。

元の関係に戻るかは分からない。向こうは完全に吹っ切れているかもしれないし、俺を受け入れてくれるかはやってみなきゃ答えは出ない。客観的に見れば、都合のいい希望でしかないだろう。ただ、それでも俺はやらないとならない。あんなにいい子を苦しめて、悲しませて、痛めつけてしまったんだから。俺は誠心誠意をもって、この思いを伝える必要がある。

待ち合わせた場所が一つずつ近づき、待ち合わせた時間が一つずつ迫ってくる。緊張

は大きくなるばかり。無くすことは不可能。無理やり抑えこむしかない。

決意を胸に強くさせていく。待ち合わせ場所の駅前の噴水広場が見えてくると、その中に修子の姿を確認した。勇ましく近づいていくと、俺に気づいた修子の前でそのまま土下座する。

「すいませんでしたっ」

7月28日の昼、柳館修子の頭。

「すいませんでしたっ」

一瞬、何が起こったのかと思った。

待ち合わせ場所の駅前の噴水広場に先に到着したので待っていると、時間ぴったりに靖

司はあらわれた。ただ、その表情の強さにすぐ異変を感じた。そのまま突き進むように

こっちに來た靖司は私の前で土下座して大声を發した。

どんな顔して会おう、どんな言葉をかけよう、どんな服を着てこう、そうここに来る

までに悩みに悩んでたものが全てどこかへ飛んでってしまった。

どんな顔して会うんだろう、どんな言葉をかけられるんだろう、どんな服を着てくる

んだろう、そうここに来るまでに考えに考えてた靖司からの行動の予想をはるかにこえてしまってたから。

「ちよっ……やめてよ、こんなところで」

とりあえず、私は訳も分からないままに靖司を止めようとする。当然、周りの人たち

からの視線はこっちに集中していて恥ずかしさもとてつもなかった。顔を見られてる私は特に。

「俺がぜんぶ悪いんだ。お前がいるのに勝手なことして。お前の気持ち、まったく考えてなかった」

「ねえ、本当にやめてよ」

靖司は制止も無視して大声をつづけてく。何がどうなってるのか把握できずにとまどうしかない。頭の中が整理しきれず、目の前の事をどう回避していくかにしか考えが向かない。

「まだ好きなんだ」

その言葉だけは一直線に胸に刺さった。それまでの言葉はどれも頭に入ってたがなかったのに、その言葉だけは針の穴に糸を通すようにそこにだけたまたま何の遮りもなく心の中心をとらえた。

「忘れられないんだ。何年たっても、何を考えても、何を思っても、最後にはそこに修子が必ずいるんだ。俺にはお前が必要なんだ。だから……」

よければ一緒にまた居てほしい」

言葉たちが一つ一つ胸を刺していく。顔を見なくてもどれだけの思いで伝えてくれるかははっきりと分かった。その純粹さのどれもが私の中に色濃く残ってる中学生の頃の大切な思いに重なっていく。

もう、私に周りにいる人たちの姿はなかった。視界に入っても対象としてとらえて

なかった。もう目の前の靖司の姿しか映ってなかった。あのときの何よりも愛しかった対象として。

靖司の両頬に両手をそえて、ゆっくり持ち上げる。子犬のような弱さもあって、精悍な強さも兼ねた顔だった。

「私のことをもう不幸にしないって誓えますか」

「……………絶対に幸せにする」

自然と笑みがこぼれた。愛しさが込み上げてきてやさしくキスをした。

六巡目（後書き）

今作はこれで最終話となります。
読んでくださった方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4049s/>

キス

2011年4月13日08時27分発行